



SGI-USAの55年（3）波濤を越えて：
アメリカ合衆国における創価学会インタナショナル

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋庭, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002792

SGI-USA の 55 年 (3) 波濤を越えて —アメリカ合衆国における創価学会インタナショナル¹

秋庭 裕

17. 大停滞

フェイズ2によって生じた混乱を收拾するために、日本から創価学会の幹部がアメリカを訪れ各地で指導を行った²。そして、それらの幹部の指導を受けて四者体制を確立することとした。NSA においてもすでにこれまでも四者の活動は行われていたが、それは各地の会館を中心に地域ごとに活動が実践されていただけで、全米をカバーした組織化はされていなかった。

それが 1977 年に、初代の NSA 婦人部長にウィリアムス夫人、男子部長にジェリー・ホール、女子部長にマージ・モリモトが任命され、四者を全米組織化した。ウィリアムス夫人は日本人、ジェリー・ホールは元ヒッピーの白人、マージ・モリモトは日系アメリカ人である。壮年部長の任命がなかったのは、理事長のウィリアムスが直接指導するという含意があったと思われるが、このときの人事には、アメリカ広布の草創期を担った日本人功労者を排除する意図があったと考えられる。

しかしながら、このときの四者体制の確立は奏効しなかった。ウィリアムス自身が次のような苛立たしそうな記述を残している。

四者体制は、「第二章」(＝フェイズ2—引用者注) 路線には不向きであった。この路線は、組織として忙しく動き回ることも、個人的な信仰の深化や家庭の盤石な基礎固めを志向するものであった。したがって、(組織—引用者補) 活動を機能的に強化しうる四者体制は失敗せざるを得なかったの

¹ 本稿は、『人間科学』第 12 号に掲載した、「SGI-USA の 55 年 (2)」の続編であり、なお、「SGI-USA の 55 年 (1)」(2013) と合わせて完結する。またなお、本文中の用語の一部の表記は、(1) (2) から改めた部分がある。

² ウィリアムス (1989 : 278)。また、以下の聖教タイムスにも当時の和泉覚副会長の来米指導が紹介されている (ST、1977 年 4 月 30-1, ST、1977 年 5 月 42-3, ST、1977 年 11 月 46-7)。

だ。結局、二年半たらずで男子部、女子部は廃されることとなった。再び活動の機能的強化をめざして四者が結成されたのは、さらにそれから三年たった1982年のことであった。(ウィリアムス1989:283)

1980年代に入るとまた変化があり、それについては順を追って論じるが、フェイズ2の開始以降、NSAにおいて組織活動よりも個人の尊重や民主化が強く求められたとき、それに応えるのに四者体制の確立をもってするという試みが適切でなかったことは明白であるだろう。男女別・年齢階梯制からなる日本的で集団主義的な組織が、このとき本格的に導入されることになったのはまことに皮肉な巡り合わせであった。

しかしながら、ここでNSA=SGIの名誉のために先回りして述べておくと、四者組織はこのしばらくあとで、アメリカ合衆国社会の文脈において、日本ではもち得なかったきわめてポジティブな機能を発揮し始めるのである。しかし、それはもうしばらく先のことである。

1977年と78年はコンベンションが行われず、また全米総会も規模を大幅に縮小したことは先に述べたが、それはまた79年も続き、NSAでは弘教そのものがほとんど停止したかのような状況となった。日本においては創価学会が摂受を旨とする第二章路線を採った以降も着実な教勢の発展をみたのに対し、NSAにおいては「弘教の成果は、無きに等しい状態にまで、落ち込んだのであった。」(ウィリアムス1989:288)

1978年にはこの停滞状況に対処しようと組織体制が見直された。全米組織は、第一ウエスタン、第二ウエスタン、ノース・イースタン、サウス・イースタン、ミッド・ウエスタン、パシフィックの六方面(territory)で構成されるようになり。それぞれに新任の方面長が任命された。また翌年には、ノース・ウエスタンが加えられた七方面体制となり、これが80年代初頭まで継続することになる。しかしながら、この新体制もすぐに停滞を打破できたわけではなかった。

1979年は、フェイズ2路線がもっとも徹底された年であったという。機関紙のワールド・トリビューンは組織的活動の記事を掲載しなくなっていたので、月例幹部会や最高執行会議の動向や、日本からの創価学会幹部の訪米なども報道されなくなっていた。日刊であったワールド・トリビューンは、77年10月

から月木の週2日刊になっていたが³、記事は教学関連と池田会長の指導の翻訳が中心となり、その翌年以降も時事的な組織動向をリアルタイムに伝える報道は減少の一途をたどった。ある意味でワールド・トリビューンは、新聞であることの意義を失っていった。

1979年6月、フェイズ2のさらなる推進のため、NSAは組織の再編を打ち出した。この再編は最高執行会議が了承したもので、このとき理事長の個人的リーダーシップは許容されなくなり、決定権は最高執行会議が掌握するところとなったという。

この79年の再編について、ウィリアムス理事長の非常に苦々しい思いがその著書の行間から浮かんでくるようだ。「この再編計画は、最高執行会議で了承されたものであったが、NSAの歴史上、最も屈辱的かつ後ろ向きの方針であった」。続けて、「再編計画の根底にあった真の目的は、容易に理解できるものであった。

“活動は各自がやりたいときにやりたいように！”—これが「第二章」礼賛者の本音であった」と強い語調で述べられている。再編は、組織を簡略化する二様で実施された。そのいずれも役職を減らしメンバーの組織運営上の責任と負担を軽減することが目的だったという。ウィリアムスの著書によるとNSAの組織ヒエラルキーは「方面」「地域」「グループ」の三段階のみになり、方面の上は理事長も含まれる最高執行会議のみとなったという。（ウィリアムス 1989：290-1）

このときの組織改編について、私たちが、当時のワールド・トリビューンや聖教タイムスなどで調べたところでは、たしかにヒエラルキーのレベルは一段階減少したが、方面（Territory）、本部（Headquarter）、支部（Chapter）、地区（District）の四段階となっている⁴。このときの組織改編についてウィリアムスが著書に記したのは1985年のことであるし、NSAは何度もめまぐるしく組織編成を見なおしている。したがって、このような食い違いが生じるのかもしれない。

組織の簡略化のもう一方は既述のように、男子部と女子部の廃止であった。男子部と女子部を廃止し、NSAを男性部と女性部の二部体制にした。つまり、

³ ワールド・トリビューンは、1964年8月創刊（月2回発行）。1965年1月に週刊、同年8月に週3回刊になり、1975年6月には日刊となった。それが、1977年10月に週2回刊となった。

⁴ 組織再編の詳細については、別稿を準備中。

男子部と壮年部、女子部と婦人部を統合するものであった。

このとき実施された二様の組織の簡略化は、そのいずれもが役職者を減らすことで、組織活動の負担を軽減することにあった。入信まもないメンバーも早期に役職に就くことで、組織運営に多大なエネルギーや時間を割くことになり、かえって信心が疎かになり、あるいは深まらない、そういう苦情が出ていたという状況が指摘されていたからである。

しかし、その結果は「NSAに致命的な打撃を与えることになった」という（ウィリアムス 1989：291）。メンバーの負担を軽減しようとして、役職者を減らすことで組織活動に割く時間やコストを減少させようとしたのであったが、意図したところとは逆の結果が生じたのである。つまり、多くの意欲的なメンバーが役職を奪われる格好になり、新しい宗教運動に身を投じようとしていた青年たちの意欲がくじかれた。このような次第で、フェイズ2路線が徹底された1979年は、混乱と低迷がいつそう深まった。

転機は翌年の秋に訪れた。

いわゆる「第一次宗門事件」によって、1979年4月創価学会第三代会長を勇退し、名誉会長となった池田は、しばらく会員の前に姿を現すことがなかったが、翌年になると外遊を行う。秋には広布二十周年の節目にあたるアメリカ合衆国を訪問した。9月30日に成田を発ち、10月21日に帰国する旅程で、ハワイ・サンフランシスコ・ワシントンDC・シカゴ・ロサンゼルスなどの各地を訪れ、様々な行事に参加している（年譜 2011:92-100）。

宗門からの圧力によって、会長を勇退した後も池田の行動は限定されていた。表立った会合に出席できず、聖教新聞紙上に登場することもはばかられたのである。この時期、会員への指導を禁じられていた池田は、会員を前にしてしばしばピアノ演奏をするようになった。言葉を口にすれば指導になってしまうが、ピアノ演奏によって言葉を介さずに考えているところや心情を託そうとしたのだという（「池田大作とその時代」編纂委員会編 2011：145）。

この時期の池田の活動は、外国から訪れた要人や文化人との会談、あるいは創価学会発足初期の功労者宅の訪問や、神奈川文化会館や立川文化会館など都心をはずれた文化会館を拠点とする集会への出席に限られていた。会長辞任後、「学会本部に私の指揮を執るべき席はなく、小さな管理室で執務を続けたこともあった」という状況におかれたのである（「池田大作とその時代」編纂委員会

編 2014 : 54)。

日本国内でいわゆる「反転攻勢」の狼煙を上げたのは、1981年12月の「大分指導」と翌年1月の「雪の秋田指導」からであったので、国外での活動ではあったが、1980年春の中国訪問（「第五次訪中」）と、その秋のアメリカ合衆国訪問が、第一次宗門事件後、池田が公式の場へ姿を現した最初であった⁵。そして、このときの池田の訪米によって、NSAは体制を整え、息を吹き返した。

もともと、NSAも池田の来米を待っていただけではなかった。1980年3月にウィリアムスを団長として二百名もの日米親善交流団が組織され訪日している。26日には神奈川文化会館でNSAメンバーの研修勤行会が開かれ、その席で池田はNSAの基本方針の転換に理解を示し、以下のように述べたという。

その大要は、再び勇躍し広布の「開拓精神」を燃やし、米国の繁栄および米国民の幸福のために活躍することを期待している。NSAは理事長を中心に互いに尊敬し合い、団結して着実に前進することを望む。そして、メンバー同士はあくまで真心と誠実さで互いを練磨するよふにといい、池田の激励だったといふ。この指導によつて、NSAは新しい路線を採択したとウィリアムスは述べている。⁶

この頃の状況を知る当時のある幹部は、78年か79年になると、ウィリアムスの次の理事長は誰なのかと考える者は少なくなかつたといふ。しかし、日本では会長勇退といふ大きな出来事があり、時代が急激に変わる中で、アメリカではもう一度、ウィリアムス理事長を中心に団結し組織固めを図ってほしいと、池田も考えたのではないかといふことである。それはまた、組織がギクシャクしているその最中に、新たにベストな人選を行うことが危ぶまれたといふことでもあったといふことである。

18. 五十二年路線問題

ともあれ、神奈川文化会館での池田の指導は、すぐにNSAの人事に反映され

⁵ 「第五次訪中」は、4月21日から29日の間、北京・広州・桂林・上海を訪れ、要人や文化人などと対談を重ねた（年譜 2011 : 62-72）。

⁶ 年譜（2011 : 92-100）、およびウィリアムス（1989 : 294-5）。

た。これまで一名だった副理事長ポストを増員し五名体制とすることになった。新たに任命された四名はいずれも日系二世であり、「言語的には、英語のほうが堪能であったが、同時に、日本的組織原理を斟酌できる能力を備えていた」とウィリアムスはコメントしている。

またこのときノース・イースタン方面長として、長くニューヨークで活動してきたディビッド・カサハラが起用された。カサハラは1936年生まれで、1964年に最初はミュージカル・ダンサーを目指しニューヨークに渡った経歴の日本人である。

この体制立て直しのための人事は、ウィリアムスが池田の指導に意を強くし、フェイズ2以前へ回帰しようとする意図に基づいたものだった。ウィリアムスが、フェイズ2路線の徹底によって組織の瓦解がもっとも早くから進んだニューヨークを中心とするノース・イースタン方面長に、以心伝心で通じる日本人を任命したのも、また英語を第一言語としているが「日本的組織原理を斟酌できる」日系人を起用したのも、そういう狙いが込められていたことは明らかである。

ウィリアムスは、池田の指導を承けて路線転換を行なったと述べているが、このとき池田は、必ずしもフェイズ2路線の撤回を支持したとは思えないし、それ以前へ復帰すべしと直接指示したとは考えられない。その理由は後述していくが、池田は、NSA が速やかに混乱を解消し、事態の収束をはかることを第一に希望したのだと思われる。フェイズ2期以降、最高執行会議と連絡を密にし、また日本から幹部を派遣するなどしてNSAの事態を見守ってきたにしても、この時期、池田にはアメリカの状況に十分な目配りをする余裕がなかったと思われる。そこで、NSA はまず状況の沈静化を優先し、しかるべき後に組織の再建を目指すべきだと、池田は考えたのではなかったろうか。

この頃、池田は多事多難な状況におかれていた。それには、1970年代の半ばころから、創価学会と宗門との間に軋轢が増してきたという事情があった。宗門の日蓮正宗から見れば信徒集団である「講」の一つにすぎない創価学会であるが、本山をすべての点で凌駕する、そういう形勢と状況が両者間に摩擦を生じさせていた。そして、緊張が一举に高まったのは、1977（昭和52）年の年明け早々のことである。

1月15日に、池田は関西戸田記念講堂で開催された第9回教学部大会におい

て、「仏教史観を語る」と題し記念講演を行う⁷。そして、この講演が大問題を引き起こす。そこでの論点は多岐にわたるが、趣旨は明瞭である。要約すれば、宗門と創価学会、つまり僧俗は、日蓮教学、あるいは法華經に照らせば、上下関係にあるのではなく対等の立場に立って相支えながら、教えを世に広めるべきであるという主張である。このとき以来、宗門によって「五十二年路線」と呼ばれる事態に創価学会は進んだ。

「仏教史観を語る」は、かなりストレートな表現で述べられている。つまり、僧俗の姿形の差は本質的ではなく、「大切なのは、あくまで出家の志であり、決意であり、修行の深さなのであり」、「現代において創価学会は、在家、出家の両方に通ずる役割を果たしているといえ」る。また、真の法師とは、「法華經を受持、読、誦、解説、書写する、つまり、五種の妙行を実践する者」であり、「在家、出家ともに、法華經受持の人は最高の供養を受ける資格があると」強調している（池田 1977 b : 22-4）。

また、仏教の歴史を概観しながら、寺院や道場について考察をめぐらせ、創価学会の本部・会館と日蓮正宗の寺院のあり方について論及している。「寺院を別名「道場」というのは、その意味（修行者の集まる場所—引用者補）からであります。儀式だけを行ない、我が身の研鑽もしない、大衆のなかへ入って布教するわけでもない既成の寺院の姿は、修行者の集まる場所でもなければ、ましてや道場であるわけは絶対はない」と断じ、そして、「寺院とは、このように、本来、仏道修行者がそこに集い、仏法を研鑽し、そこから布教へと向かうための道場、拠点であることは論をまちません。その本義からするならば、今日、創価学会の本部・会館、また研修所は……「近代における寺院」というべき」であると論じている。「もちろん日蓮正宗の寺院は、御授戒、葬儀、法事という重要な儀式を中心とした場」であるとも述べているが、こちらは補足的で、力点は明らかに創価学会の会館の今日的な重要性の強調にあったように思われる（池田 1977 b : 25-6）。

池田が、なぜこのような主張をとるようになったのか、ここにいたるまでに宗門と創価学会の間にどのような事情があったのだろうか。きわめて入り組んだ事情をごく簡潔に述べれば、それは以下のように概観できるだろう。

⁷ この講演は、その年3月発行の『大白蓮華』に収録されている（池田 1977 b）。

宗門を外護する信徒集団である創価学会は、戦後から高度経済成長期にかけ驚くほどの大成長を遂げる。創価学会の大発展は、それに支えられる宗門にも安定と発展をもたらした。創価学会初代会長の牧口常三郎が日蓮正宗に入信した昭和初期では、日蓮正宗の末寺はわずか五十カ寺程度にすぎなかったという。それが、第二代会長となった戸田によって宗門への寺院の寄進が始められ、第三代会長に就任した池田によっても推進され、その数は1979年には238カ寺におよんだ。創価学会が日蓮正宗から「破門」され、最終的に袂を分かち直前の1990年までには356カ寺にも達し、両者の決裂がなければ、創価学会はさらに約百カ寺の寄進を予定していた。⁸

すでに述べたが、1972年に建立された正本堂のみならず、早くは1958年3月の戸田城聖生前の最後の大事業であった本門大講堂も、また、その資材の吟味に会長就任まもない池田が世界各地を視察したエピソードも知られているが、1964年落慶の大客殿など、これら数次にわたる大伽藍の宗門への建立寄進は、その時代ごと創価学会が総力を上げて行ってきた（朝日新聞アエラ編集部2000：215）。これにくわえ、そもそも戦中から戦後にかけて疲弊した大石寺へ、大規模な境内地の寄進（現寺域117万坪の約九割）もあった（西山1998：116）。

宗門と共生的であった創価学会のあり方を指摘して、西山茂は「内棲型」新宗教と呼んだが、その意味は、「中核的な教義を共有しつつも、相対的に独自の性格を持つ既成教団内の」教団ということである（西山1998：114）。つまり、創価学会は日蓮正宗の教学をもとに、信仰の伝統性と正統性を主張する論拠を得たし、創価学会員が日蓮正宗寺院の檀家となることで葬儀や法事、さらには結婚式の導師を依頼し、とくに初期には墓所もその檀家となった寺院から提供を受けた。

要約すれば、創価学会は、宗門との連携によって、既成仏教教団が提供するのと遜色のない日本宗教の伝統に則った便益を学会員に与えることができ、宗門の側からすれば、創価学会から幾重にもわたる手厚い「外護」を得ることができたわけである。この共存の最良の時期は、今風な表現を借りれば、まさに“Win-Win”な関係にあった。

しかしながら、生物学的な共生関係がしばしばそうであるように、創価学会

⁸ 年譜（2011:883）、および島田（2004：109-10）を参照。

と宗門の共生関係も、終始緊張をはらんでいたと見るほうが実情に即していたと思われる⁹。「下部構造」においては創価学会へ依存せざるをえなかった宗門であったが、反対に、創価学会は、宗教シンボルの聖なる核心において、宗門抜きに存立することができないという事情があった。聖なる核心とは、2014年11月に「創価学会会則 第一章 第二条」の教義が改正されるまで、創価学会は「一閻浮提総与・三大秘法の大御本尊を信受」する仏意仏勅の教団であると定められていたが¹⁰、この大御本尊こそ、大石寺に安置される「日蓮大聖人御図頭の弘安二年の御本尊」であるとされていたからである（『聖教新聞』2014年11月8日3面）。

この、崇敬の焦点である聖なる象徴を宗門に負っているという事情こそ、西山が指摘した「内棲型」の内棲たる所以であったが¹¹、そうであるがゆえに、宗門側に、抜きがたい優越感、つまり「出家の方が在家よりも上だ」という意識と態度をもたらしていたと考えられる。そして、この意識と態度はしばしば宗教者としてふさわしくない振る舞いに帰着したという¹²。

おそらく1970年代の初頭ころまで、創価学会と宗門は融和的な関係にあり、両者は手を携えて発展してきた。それが最終的に、創価学会が宗門と袂を分かち、「魂の独立」を果たすのは「第二次宗門問題」を経ての1991年のことであったが、しかしながら、「五十二年路線」問題以降はもちろん、おそらく蜜月とされていた時代にも、創価学会と宗門の緊張と摩擦は、通奏低音のように存在していたとみることができそうである。

さて、ここまでアメリカから離れ日本の状況の描写を続けてきたが、もう一度、「仏教史観を語る」当時まで戻ろう。つまり、NSAがフェイズ2路線を採り、

⁹ 例えば、『人間革命』第12巻の「寂光」の章を参照のこと。戸田最晩年の大石寺大講堂の落慶当時の宗門のあり方を批判的に描いている。第12巻の執筆は、宗門より破門された後の1993年の執筆であるが、創価学会と宗門との緊張は、早い時期から始まっていたことが示唆されていると思われる。

¹⁰ 創価学会広報室（2014：50）を参照。なお、「破門」前までは、「本門戒壇の大御本尊」とされ、これはまったく宗門の伝統的呼称そのものであった。

¹¹ この点に関連し、2004年当時の西山の興味深い以下のコメントを紹介しておく。「創価学会が日蓮正宗から（中略）独立するには、大石寺にある「戒壇の本尊」への信仰と訣別しなければならないが、創立以来、これが同会の信仰の根本にある以上、簡単に否定できないところに同会の究極の悩みがある。」（西山 2004：181）。結局、「魂の独立」以来、「内棲型」を脱するのにおよそ四半世紀を要したということかもしれない。

¹² 例えば、島田（2004：113-4）など。

そのことで大きな混乱をきわめた、まさにそのとき太平洋をはさんだ日本において、創価学会と池田は別の非常に大きな困難に直面していたわけである。

先述したように、結局 1979 年 4 月に池田が会長を勇退することで「第一次宗門問題」はいちおうの收拾をみるが、宗門の圧力によって困難な状況は続き、池田は表立った活動はできなかった。

つまり、NSA が迷走をきわめるとき、池田はアメリカや NSA に目配りし対処する余裕がなかったはずである。実際、アメリカ訪問も、1975 年夏のブルー・ハワイ・コンベンション以来、1980 年秋まで行っていない。80 年秋の池田訪米に先立って三月に NSA の訪問団が日本を訪れ、池田の指導を承け、フェイズ 2 による混乱を乗り越えようと新人事を行なったことも述べたが、NSA の体制立て直しが軌道に乗るのは、9 月からの池田の訪米による直接の指導がきっかけとなった。

そして、池田にとっても、この 1980 年の訪米が、海外においてのことであったが、会長勇退後再び直接会員の前に姿を現す最初となった。しかし、重要なのはただそれだけでなく、NSA にとって、そしてさらに池田と創価学会、また SGI にとっても 80 年代から 90 年代へかけて、その活動の基本型を見出すきっかけになったと考えられる点が特筆すべきだと思われる。

19. シカゴとカプチャー・ザ・スピリット

シカゴは、1980 年秋の池田のアメリカ訪問の重要な焦点となった。そのとき(10月12日)開催された「カプチャー・ザ・スピリット」(“Capture the Spirit”)は、いくつかの意味で非常に興味ふかい¹³。ひとつには、それがこの翌年シカゴから開始されることになった「世界平和文化祭」の原型となったことである。「世界平和文化祭」(後に「世界青年平和文化祭」)は¹⁴、80年代から90年代末

¹³ シカゴ総会に付随して実施されたこの文化祭は、規模が小さかったため(舞台に五百人が参加、観衆は五千人)、“Capture the Spirit”(カプチャー・ザ・スピリット)の名称は日本ではあまり知られていない(原義は、学会精神の鼓舞の意)。したがって言及される機会も少ないであるが、そのときはふつう「シカゴ文化祭」と呼ばれている(WT, 2010年10月2日, Special Issue, p.12)。また、「カプチャー・ザ・スピリット」に先立つ、日本での文化祭については後述する。

¹⁴ 1985年7月ハワイで開催された第5回以降は「世界青年平和文化祭」となる。1998年

にかけて、この時代の創価学会と SGI を特徴付けるイベントだったといえることができる。

世界青年平和文化祭は、巨大なスタジアムなどを会場に、一糸乱れぬ人文字やマスゲームや「五段円塔」でよく知られている組体操を披露したりして、全組織の団結力を発揚する機会として、若い世代の学会員を結集する他に代替のない活動の場となっていた。この時代の青年部員たちは、一年の行事暦の中心に世界青年平和文化祭を据え、本番の檜舞台に向けてエネルギーを傾注し、組織活動のなかで深い充実感を体験していったのである。その原型の一つが「カプチャー・ザ・スピリット」であったと考えられる。

その当時、長くシカゴで活動してきたリチャード・ササキはミッド・ウエスタン方面長であったが、なんとしても「池田先生に激励していただきかった」のだと言う¹⁵。その理由は、フェイズ2によって NSA が低迷をきわめているということもあったと思われるが、シカゴには後述するような別の切実な事情があった。

シカゴは、じつはフェイズ2による混乱は少なかったが、混乱がほとんど生じなかったのはハワイであったという。ハワイでは日本人メンバーの割合が高く、フェイズ2期に提起された論点に一定の共感が集まりつつも、同時に日本人的な感性が随所に発揮されることで、自然に日本の文化伝統を斟酌して、アメリカ人メンバーとの間に生じる摩擦を吸収することができたということである。このような次第で、ハワイでは四者体制も揺らがなかったという。

シカゴも、ハワイと似た状況にあった。シカゴの NSA はアメリカ化のスピードが遅かった。つまり、1970年には NSA 全体ではメンバーに占める日本人の割合は三割にまで減少していたが、シカゴでは1980年代の終わりになっても、日本人が約半数を占めていたという。

それでも、シカゴの青年メンバーの中には、ロサンゼルスで影響を受けて帰って来た者もいたが、ロサンゼルスやニューヨークのように、日本文化は一切

の第18回まで実施された。

¹⁵ リチャード・ササキさんへのインタビューは、2008年6月27日にシカゴ文化会館において行った。ササキさんは、1941年日本生まれ、1964年大学卒業後、すでに渡米していた姉を頼って自身も渡米しシティカレッジに通うが、65年から最初はパートで NSA で働くようになる。1969年から1982年までシカゴ会館勤務。1980年にはミッド・ウエスタン方面長、1982年には全米男子部長の任命を受けている。

不要であるというような極端な主張がなされることはなかった。ササキによれば、シカゴでは「(広布初期の功労者の) ポールさんがアメリカ人メンバーを説得したこともあって、会館から池田先生の写真を外したりすることはなかった」。

シカゴが揺らぐことが少なかったのは、たんに日本人の割合が高かったからというだけでなく、その背景にシカゴ広布の先駆けとなったツヤコさんとポールさんのリープマン夫妻の格別の献身的な働きがあったことが知られている。ツヤコさんは、1960年の池田会長初訪米のとき、10月8日にシカゴ・ミッドウェー空港において一行を出迎えたメンバーの一人であるが、ツヤコさんとポールさんは手を携えてシカゴにこの信仰を根付かせるため尽力した。

リープマン夫妻の足跡を辿りながら、NSA とシカゴの関わりを概観しよう¹⁶。そこには、アメリカ合衆国における日蓮仏法の定着を知るための、非常に重要なポイントが指し示されていると思われる。

ツヤコさんは、1926年母の実家の山梨県に出生した。戦前戦中、浅草で製靴工場を経営する父の事業は、軍靴の需要もあり順調で、恵まれた少女時代を送ったが、戦火が激しくなり東京が空襲され母と弟を失う。ツヤコさんは、1953年折伏され、翌年御本尊を受けるが、それは、母と弟の命を奪った戦争をこの世からなくしたいという、なによりも世界平和を願う気持ちからであった。平和を希求する思いは、有名な戸田の豊島公会堂で行われた金曜の御書講義の講筵に連なるうちに、さらにいっそう強くなったという。

戦後、丸の内生命保険会社に勤務していたとき、同じビルに入っていた米石油メジャー会社に派遣されていたエンジニアのポールさんと知り合う。エレベーターで出会い、見染められたのである。ポールさんは母に手紙を書きツヤコさんとの結婚の許可を得て、横浜のカトリック教会で式を挙げ、結婚後一年あまりして1955年シカゴに戻る。

ポールさんの母は熱心なカトリックであったが、ポールさんはあまり熱心ではなかったため、ツヤコさんが「私、この信心(日蓮仏法)はすばらしいから、

¹⁶ ツヤコ・リープマンさんへのインタビューは、2008年6月26日にシカゴ文化会館において実施した。リープマンさんへのインタビューは、川端・秋庭・稲場(2010)において、セツコさん、夫はイアン・シュミットさんという仮名で登場する。また、池田のWTへの寄稿(‘My Friends of NSA(8) Tsuyako Liebmann’, 1981年2月23日, p.6/8)も参照した。この記事がWTに掲載された時期が、「カプチャー・ザ・スピリット」とシカゴで開催された第1回世界平和文化祭(後述)の間であったことも興味深い。

ずーっと続けてやっていますけど、OK でしょう？」と尋ねると、「それは、あなた次第だから」と受け入れてもらえた。

それで次に、「あなたが、朝晩三遍、南無妙法蓮華経と、私の御本尊に向かって唱えてくれたら、ほんとうに嬉しい」と言うと、ポールさんは“I do it for you!”と答えてくれた。「自分は信じるわけじゃないけど」、「I do it for you!”つまり、「あなたのために、やってあげる。」と言って、朝晩ちゃんと題目を唱えてくれたという。

半世紀以上も前のこの時代、日本では妻が独自に信仰をもつことに反対する夫は少なくなかったと思われる。それが、アメリカでは“I do it for you!”と言って、夫が妻に寄り添う姿がとても新鮮で印象的である。同じ家族や夫婦といっても、太平洋をはさんで向こうとこちら側では、愛情表現というか、夫婦関係やそのあり方、そして宗教に対する態度もずいぶん違っていたことが偲ばれ感慨深い。

きちんと題目をあげるようになると、ポールさんにもちゃんとその結果が出たという。会社で難しい実験をしていたとき、南無妙法蓮華経と唱えると、とうてい一回ではできないと思われた実験がスパッと一回で上手くいくという顕著な功德だったという。

このような功德を実感したこともあってか、ポールさんは、ツヤコさんが折伏や激励にあっちこっち行くとき、快く車の運転を引き受けるようになっていった。ウィークデイはシカゴの北から南まで、週末はミシガン、ケンタッキー、セントルイス、カンサスシティ、さらにはニューオーリンズに到るまで、アメリカ合衆国中西部を深々と、地方指導、家庭訪問、折伏に夫妻は邁進したという。

ポールさんは、1960年の池田会長のシカゴ滞在中、自分の1960年型の白いフォードを駆って運転手役を務めている。このとき間近に池田会長に接し、ポールさんは「会長の厳粛な姿に深い感銘を受け」、自らの信心を本格化させることになったという。

ツヤコさんは女学校時代、すでに英語の授業はなくなっていたので、英語を勉強する機会がなかった。それで、毎日英単語を二つずつ覚えることにした。その成果もありシカゴに来たとき少しは分かったが、本格的には折伏と激励を通し英語をマスターしたのだという。ポールさんには苦心し日蓮の教えや池田

の言葉を一生懸命説明したりしながら、またその次には、ポールさんがアメリカ人に信心を説明する様子を見聞きしながら、次第次第に英語を身につけていった。

1960年に池田会長が訪米の際、創価学会を紹介する *The Soka Gakkai* が編まれたことは1-6節ですでに述べたが、それまで布教に使える英語媒体は非常に少なかった。その間、リーブマン夫妻がまさに日米の架け橋となって弘教したことは特筆に値する。池田の初訪米によってシカゴで地区が結成されたが、ツヤコさんはこのとき地区部長に任命されている。

翌年の1961年にシカゴ支部が結成されると、ツヤコさんはその初代の支部長にも任命され、さらにその翌年ポールさんは支部顧問となっている。ポールさんのような、白人で教育があり、また大会社のエンジニアという威信の高い職業に従事し、そして、父方のドイツ系の出自もあってか非常に謹厳実直な人柄のアメリカ人がキーパーソンとなることで、シカゴ広布はフェイズ2期も堅固であったということもできるだろう。

1968年にシカゴに会館(Chicago Community Center)が設けられたが、それはリーブマン夫妻の自宅だった。1972年になると、その夫妻の家から徒歩数分のところに独立したシカゴ会館¹⁷がオープンする。それは元ユダヤ教のシナゴグだった建物であり、私たちが訪れた2008年には韓国人のキリスト教会となっていたのは、この付近の住民構成の変化を反映しているのがいかにもシカゴ的な都市状況を物語っている。

1983年にはシカゴ・サウス会館(Chicago South Community Center)が新たにオープンする(Chappell 2000b: 316)。アフリカ系アメリカ人メンバーが増加し、彼らの多くが市の南部に居住しているためである。その翌年に、シカゴ会館は市の中心部に近いところに、すなわち南に移転し、シカゴ文化会館(Chicago Culture Center)¹⁸としてオープンしている。

さらに、1995年にシカゴ文化会館は現在地のシカゴの中心部「ループ」¹⁹の南に移転しているが、じつは、シカゴにおいては広布の進展とともに、会館が

¹⁷ 住所は、3434 West Foster Avenue, Chicago, IL。

¹⁸ 住所は、624 West Wrightwood, Chicago, IL。

¹⁹ ループ (Loop) は、シカゴ交通局が運営する“L”(ダウンタウンを走る高架鉄道および地下鉄)の環状線(東西500m、南北900m)で、シカゴの市域は、このループで北部と南部に分かれる。

南へ、南へと移転したことが、非常に重要な意味をもっているのである。

ニューヨーク、ロサンゼルスに次いで、アメリカ合衆国第三番目の大都市であるシカゴは、人口はこのところ減少気味で三百万人を切ったが、その三分の一強が白人で、ほぼ同数のアフリカ系の人々が居住している。ヒスパニック系住民は二割強、アジア系は5%ほどと少ない。合衆国全体では、白人が72.4%、アフリカ系が12.6%であるから²⁰、シカゴは白人の比率が低く、アフリカ系の比率が高く、多民族集団状況が非常に顕著であることが指摘できる。

この民族別人口構成は、今日およそ五千人強のシカゴのSGIのメンバーにも反映されていて、役職者を見ると（それは一般メンバーの比率を反映していると考えられるが）、およそ半数の46.9%がアフリカ系であり、白人系の35%、日本人の16.3%と比べると、アフリカ系がかなり高い比率を占めていることが分かる。ちなみに他都市では、アフリカ系の比率は、ワシントンが30.7%、ニューヨークが30.3%、ロサンゼルスが22.1%、サンフランシスコが17.2%、ボストンが13.3%となっていて、他のどの都市よりもシカゴのアフリカ系の役職者の比率が高く、そして抜きん出ていることが分かる（Chappell 2000b : 315）。

シカゴは別名“The City of Neighborhood”、つまり「近隣の街」と称される²¹。その意味合いは陰翳を帯びているが、多くの民族集団が近隣に住み混んで、シカゴという都市を形成していることを描写するキーワードとなっている。シカゴには今日も多くのエスニック・タウンが存在していて、新旧のチャイナタウンにコリアンタウン、ユダヤ人街、人口としてはポーランド系やドイツ人、ギリシア人も少なくない。最近ではイスラム系住民も増加しているのは、ハラール食料品店やアラブ系住民の衣料品店も目にすることが多いことから分かる。

しかしながら、これら多くのエスニック・グループは空間的には近接して居住しながらも、実際、和気あいあいと交際しているのでなければ、互いに深い交流もほとんどなく、日常生活で接点も希薄な毎日を送っているといった方が現実に近い。このような状況を指して、セグリゲーション（segregation）、つまり分離・隔離という言葉も用いられる。

エスニシティに加え、階層的な多様性と分離が、シカゴでは目に「見える」

²⁰ 2010年の国勢調査(<http://www.census.gov/>, 2015年8月20日閲覧)による。

²¹ このあたりのシカゴについての記述は、別稿を準備中。

景観を形づくっているのである。1920年代以降、アメリカ社会学をリードした一つの中心がシカゴ学派であったが、それはまさに、このシカゴという都市そのものをテキストとして読み解くところから勃興したことが、私たちもシカゴを訪れて、目からウロコが落ちるように強く実感できた。

さて、話題を1980年のシカゴと「カプチャー・ザ・スピリット」まで戻そう。

1980年にはシカゴ会館は、まだ元シナゴークの会館でありループの北にあった。その南東10キロちょっとのところには、メジャーリーグ球団のカブズの本拠地であるリグレー・フィールドがある²²。ループの北側を車で走っていると住戸の窓辺にカブズを応援する小旗が飾られているのをしばしば目にする。ループの北に多く住む白人系の住民は、圧倒的にカブズのファンなのである。

野球に詳しい方なら、もう一つシカゴにフランチャイズするメジャーリーグ球団があることをご存知だろう。ホワイトソックスである。ホワイトソックスの本拠地であるU. S. セルラー・フィールドは、じつは、1995年に移転した現在のシカゴ文化会館の南へわずか四キロほどのところなのである。

つまり、シカゴのSGIの会館は、広布の礎がおかれて以来、一貫して南へ、南へと移動してきた。この事実は、シンプルな事実にすぎないが、シカゴ広布は年月を重ねるにつれアフリカ系住民への弘教が進展してきたことを雄弁に物語っているのであり、それは同時に、シカゴでの弘教が常に大きな困難に直面しつつ進められてきたことも意味している。

シカゴでは、二十世紀に入って以降、都市問題・貧困問題と民族問題が輻輳し、大きな社会問題となってきた。山谷はあったがこれら一連の問題を解きほぐすのが常に大きな困難な政治課題となってきた。そういう社会的背景のなかでシカゴでの弘教は進んだが、NSAにとっても、シカゴにあっては一貫して民族問題にどう取り組むかが非常に大きなテーマであり続けてきた。

このシカゴに顕著な社会問題は、じつはアメリカ広布の初期から意識されてきたことが、池田のシカゴ初訪問の際のエピソードとして、リンカーン・パークでの出来事がしばしば採り上げられることから分かる。リンカーン・パークは、リグレー・フィールドの南、ループの北のミシガン湖岸の広大な公園で

²² ちなみに、1984年に移転し開館したシカゴ文化会館は、リグレー・フィールドの南東2.5キロほどのところにある。元シナゴークの会館は、リグレー・フィールドを挟んでちょうど反対方向になる。

あるが²³、シカゴ到着の翌朝、リーブマン夫妻に案内されて池田はリンカーン・パークを散策した。そのとき、アフリカ系アメリカ人の少年がある差別的な扱いを受けた光景を目にし、奴隷解放宣言を行った大統領の名が冠された公園でのその出来事に心を痛めたことが『新・人間革命』第一巻（池田 2003）で描かれている。

『新・人間革命』第一巻では、リンカーン・パークでの出来事に続いて、ローザ・パークスの抗議に端を発したバス・ボイコット運動、そして公民権運動の端緒が紹介されている。これが執筆されたのは、リンカーン・パークでの見聞そのものからだいぶ隔たった時期であるが、シカゴでは民族差別が焦眉の社会問題であること、またアメリカ合衆国における民族問題が非常に重大であることを池田が実感するきっかけとして、シカゴ初訪問の際の見聞があったことが理解できるだろう。

ともあれ、1980年当時のそのような社会状況のなかで、「カプチャー・ザ・スピリット」は、本当にシカゴ住民の心の交流を伴う「近隣の街」を達成しようとする、そういう試みとして産み出された。その実現に向けて、1980年5月3日からシカゴでは唱題会が始められたという。ササキが尽力し、「先生を呼びたい。先生に励ましていただきたいので、そのための舞台を演出してもらいたい」とスペイン出身の舞台芸術家でメンバーのパスカル氏に依頼したという。パスカル夫人も当時プリマドンナとして活躍していた高名な人であったので、夫妻に舞台の企画と演出・出演が委ねられた。

5月に唱題会を始めた時点では「まだ先生が来られるかどうか分からなかったけど、8月24日にリハーサルを行うことにした。リハーサルに向けて練習を開始した」。そのリハーサルに、ササキはウィリアムスを招いた。リハーサルを見て、ウィリアムスは大感激したのだという。「先生の写真を掲げて、先生に見てもらおう」と思ってリハーサルをしていたが、ウィリアムスは「先生への思いが、皆んなの中にある」と感激し、ホテルから直接、池田に電話したのだという。すると、「池田先生も、万難を排して行こう」と決断したのだという。

結局、この機を捉えるかのように、ウィリアムスは、コンベンションや文化祭、あるいはストリート折伏など組織を挙げての大量動員型の組織活動に復帰

²³ ということは、シカゴの北部であり白人中心の地区であることに注意。

し、旧来の路線へ回帰することになったのであったが、1980年のシカゴにおいてはそれが奏功するのである。

20. カプチャー・ザ・スピリットから世界青年平和文化祭へ

1980年3月の方針転換もあり、10月に「カプチャー・ザ・スピリット」が開催されることになったが、シカゴが開催地に選ばれた理由は、すでに述べたようにフェイズ2による混乱の打撃が少なかったという事情も小さくなかった。

混乱がもっとも大きかったのは、ニューヨークを中心とするノース・イースタン方面とロサンゼルスやサンフランシスコなど西海岸地方の都市部であったが、シカゴを含むミッド・ウエスタン方面は組織の形態とメンバーの団結が比較的保たれていたという。それは先述のようにリーブマン夫妻のような功労者の献身と日本人比率の高さがあってのことだと考えてよいだろう。

全米のNSA組織的観点からシカゴが「カプチャー・ザ・スピリット」の開催地に選ばれたが、70年代に数々の大コンベンションを行ってきたウィリアムスの目には、その規模など物足りないところがあった(ウィリアムス1989:296)。しかし、ウィリアムスが集団的組織活動に託した意図は、この時代、民族問題に苦しむシカゴの住民に一筋の光明を投げかけたといつてよい。それはどのような事情によるものか、順を追って述べていこう。

「カプチャー・ザ・スピリット」の後、1981年からNSAコンベンションは復活していく²⁴。1982年にはワシントンDCで総勢一万人のパレード‘Washington DC Rally’が実施され、この後も80年代後半まで再び大コンベンション時代が再来する。結局ウィリアムス時代は、コンベンションに終始したといつていよ

²⁴ 正確には、1981年にはNSAコンベンションは実施されていないが、6月にシカゴでSGI主催の第1回世界平和文化祭が実施された。これは「カプチャー・ザ・スピリット」を雛形として、規模を拡大したイベントで、出演者千二百人、来賓五百人、観客は二万人だった。この準備のため、ホノルル・ロサンゼルス・ダラス・マイアミで文化祭が予行演習をかねて開催されている。また同年8月には第2回SGI総会がホノルルで開催された。したがって、1981年にはNSA主催のコンベンションは実施されなかったが、実質的にはNASが中心となって二度の大イベントと数次の文化祭を実施した。また、すぐ後述するが、第1回SGI総会は、1980年10月ロサンゼルスで開催されている。このようにコンベンション時代が再来した。

いだろうが、しかし、それはなぜなのか、彼はどのような意図をコンベンションや文化祭に込めていたのだろうか考察してみたい。以下はウィリアムスの弁であるが、その理由が素直に述べられていて非常に興味深い。

NSA文化祭の著しい特色は、それが全員参加を合言葉として運営されているところにある。演技する者は舞台の上で活躍し、演技を演出する役員、進行部門の役員、会場担当の役員は、それぞれの部署で責任を果たす。婦人部の中には、会館で衣装を縫製するメンバーもいる。そして、観客もまた、文化祭に参加する。演技者と一体になって文化祭を盛り上げるだけでなく、この観客は、準備期間中、メンバーの送迎や夜食の手配などいろいろなところで応援をする支援部隊を構成している。一言でいえば、NSAの文化祭は、「組織の総力戦」なのである。この特色を理解すれば、文化祭が大成功に終わることが、直接NSAの組織の充実につながることも首肯されるであろう。（ウィリアムス 1989：303）

引用の行間から浮かび上がってくるのは、ウィリアムスが文化祭やコンベンション、あるいは大量動員型の弘教に託したところであるが、まさに戸田時代の折伏大行進のエートスと符合するだろう。「組織の総力戦」という言葉遣いそのものが、ウィリアムスが薫陶を受けた時代の創価学会の精神を象徴しているといつてよいかもしれない。そして、この点が、フェイズ2時代になると個人主義と民主主義にそぐわないとして、アメリカ人メンバーから批判されたのであった。

しかし、民族集団分断状況に苦しむ1980年のシカゴにおいて、地域住民が「全員参加を合言葉として運営されている」ようなイベントは存在しなかった。シカゴにおけるアフリカ系住民の比率の高さと多民族的住民構成についてはすでに指摘したが、これら多様な背景をもつ住民が一堂に会する機会はきわめて稀だったのである。「近隣の街」シカゴの住民は、容易に「全員参加を合言葉」とすることもできなかつたし、「組織の総力戦」というような言葉遣いはともあれ、民族を超えた連帯や団結は望むべくもなかつたのである。

それが、「カプチャー・ザ・スピリット」は、目に見える形で「近隣の街」シカゴにおける「異体同心」の可能性を示すことができたのである。十三世紀日本・

熱原ならぬ二〇世紀シカゴの住民についても「異体同心なれば万事を成し異体異心なれば諸事叶う事なし」（御書：1463）という御書の訓えは、（おそらく日蓮その人が想定した時空を超えて）シカゴの住民を導く希望の指針となり得たのである。

異体同心という考えは、「皆が一緒になることが求められ、異なる民族でも一つの目的に向かって進んでいくのです。それは（シカゴ住民の一引用者補）私たちにとって、連鎖的に効果があります。つまり、いっせいに（民族が）違う人たちが同じ作業する中で学ぶことができるのは、皆同じなんだ、人間として共通なんだ、怖れとか、苦しみとか、あるいは幸せとかは、皆だれも同じように感じるんだということを学ぶことができる。だから自分は、それを通して、白人に対する偏見をもたないようになれた」とは、シカゴの古くからのアフリカ系メンバーの一人のデリックさんの言葉である。

じつは、「カプチャー・ザ・スピリット」やコンベンションだけでなく、ある種の「意図せざる結果」²⁵、あるいは「意図を超えた結果」（による潜在的順機能）を招来したのは、四者組織においても非常に顕著な点がある（もっとも「意図せざる結果」とか「意図を超えた結果」などと言うと、ウィリアムス理事長に礼を失することになるのかもしれない。それこそ意図したところであるのだと）。順序立ててその事情を述べよう。

四者組織は、フェイズ2によって生じた組織の混乱を收拾しようとして1977年に全米規模で組織化されたが、上手くいかなかったことはすでに述べた。それは、個人の尊重や組織の民主化が求められたときに、男女別・世代別の集団主義的再編を施行するという、まるで向かうべき方向の反対側へ舵を切るような改革を行ったからであった。

それが1982年3月になると、男子部と女子部が再結成される。またこれに先立って、1980年秋の池田訪米の頃から、フェイズ2の進展とともに組織の役職から遠ざけられた草創期から活躍した日本人婦人たちが、次第に要職に返り咲きつつあったが²⁶、四者組織はこの再結成以降、次第に活動の実を上げNSAに定着する。

²⁵ 「意図せざる結果」、また「機能」概念については、マートン（1961）を参照のこと。

²⁶ ハワイ・サンフランシスコ・ワシントンDC・ニューヨーク・シカゴ（ツヤコ・リーブマン）などで草創期を担った女性陣がNSA副婦人部長に任命された。

1982年に男子部長に就任したのは先に紹介したササキであった。女子部長もまた日本人であった。1977年に男子部長と女子部長に就任したのは、アメリカ人と英語が母語の日系アメリカ人であったから、このときの人選はどちらかというところ、日本回帰的であった。このような人事にどのような狙いがあったのか、推測も交じるがその理由は次のよう考えることができそうである。

1980年3月の日本での研修会と、さらにはその秋の池田訪米によって、ウィリアムスがコンベンションを軸とするような旧来の路線への復帰が認められたことによって、フェイズ2以降の日本文化排除や日本人幹部排斥が行き過ぎだと考えられるようになり、再度日本人婦人たちが要職へ起用されたのだと思われる。1977年の全米男子部・女子部の創設は、「正義感と情熱のあり余る若者だけの組織」となってしまうと上手く機能しなかった。その「混乱を整理すべく、まず組織の未熟性を認め、その上で信仰に厚い人々を組織の要職に返り咲かせた」とウィリアムスは記している（ウィリアムス1989：298）。

もう一点、ササキの男子部長への登用は、このとき青年部長や壮年部長の任命はなかったので、この男子部長というポストが非常に重要であったと考えられるが、そこにササキが起用されたわけである。これは、「カプチャー・ザ・スピリット」がNSAにとって起死回生の一打となったことが、氏の業績として高く評価されたからと想像できそうである。

つまり、シカゴはもともとNSAの組織基盤がしっかりとしていたので、フェイズ2による後退は少なかった。しかしながら、民族集団間の軋轢が深刻な問題であったのであるが、「組織の総力戦」である「カプチャー・ザ・スピリット」がNSAメンバー間に団結をもたらした。すると、その成功がウィリアムスとNSAに自信を回復させたのだと思われる。

四者組織も、再結成以降、次第に定着していく。婦人部長・青年部長・男子部長・女子部長がそろって任命されるのは後の1989年のことであるが、男女別・世代別の集団組織原理が、その組織原理ゆえに民族分離状況を超える、（つまり、エスニシティ別に集団化しない＝様々なエスニシティが混じる集団化を促す）新たな連帯を産み出すことが明示的に意識され強調されるようになるのである。

このような次第で、1980年10月の池田訪米の時期が、NSAにとってフェイズ2以降の低迷を脱する転換期となったのである。

さらにまた、創価学会の会長を退いた池田にとっても、このときのアメリカ訪

問は新たな非常に大きな意味があり、また転機となったと思われる。一つには、ここまで縷々述べてきた「カプチャー・ザ・スピリット」の重要性であり、その意義を高く評価したがゆえに、早くも翌年6月、第一回世界平和文化祭として同じシカゴでいっそう拡大されて挙行されたのだろう²⁷。

「カプチャー・ザ・スピリット」にすぐ引き続いて開催されたアメリカ広布二十周年記念シカゴ総会での挨拶において、池田は、これからのアメリカ広布における教学の重要性を強調し、将来の指針を示している。

なぜ教学が必要なのか、という課題について、きょうは静かに語りあい、確認しあいたいと思う。……中略……。

宗教には必ず教義がある。教義がないものは、真実の宗教ではない。またその教義がどれほど深く、道理に合致しているかによって、宗教の優劣を比較することができる。日蓮大聖人の本門ほんもん寿量じゆりやうもん文底秘沈ていひちんの大法こそが、最高にすぐれ、一切の人類を救いうる宗教であるということは、教学を深めれば深めるほど明確になってくるのである。……. 中略……

多くの人が我見におちいることなく、御書に照らして正しい信心を深めていくために、教学が必要になるといってよい。したがって教学は、信心の確信を強め、広宣流布を正しく志向していくためにある。

アメリカ SGI²⁸もこれからは、多くの学者や科学者等にも仏法を知らしめる時代に入ったといっってよい。…中略…理路整然とした大仏法の教学を身に体したリーダーが、数多く要請される時代に入っていると私はみたい。(池田 2008 : 81-2)

池田は、今後アメリカで必要なのは教学であることを強調したが（つまり、これまでのアメリカ広布において、教学研鑽が充分でなかったと指摘し、将来の課題を示したととらえることができる）、しかしこの指摘は、このときはウィリアムスと NSA の路線には反映されなかった。このとき直接に影響が大きかったのは、同時に池田が行った、翌年にシカゴで世界平和文化祭を開催するよう

²⁷ 年譜（2011 : 165）を参照のこと。

²⁸ 引用は、池田（2008）によるが、1991年以前は「NSA」だった名称も引用した書籍では「アメリカ SGI」に表記が統一されている。

にとの提案であり、これはすぐに実現したわけである（年譜 2011：96-7）。

池田は「カプチャー・ザ・スピリット」の何に触発され、なぜ世界平和文化祭の開催を提案したのだろうか。歴史をかいつまんで概観しながら考えてみたい。

創価学会は戦後の早い時期から、最初は体育大会であった青年部主体の「若人の祭典」を開催してきた。第一回目は「世紀の祭典」と銘打って1954年にスタートしている。1957年9月、横浜の三ツ沢競技場で行われた第四回目の東日本体育大会「若人の祭典」の開会式において、戸田第二代会長が「原水爆禁止宣言」を発表したことはよく知られている。

「文化」の名が冠せられるのは、1963年開催の第一回関西文化祭あたりからであるが、1967年開催の東京文化祭（東京・国立競技場）からは、規模が拡大するとともに絢爛豪華なイベントとして営まれた。四万二千人による動く人文字や人間壁画、伝統の男子部組み体操など、スタンドとフィールドいっばいに躍動する演技が、五千人の来賓と十万人の観衆を驚かせたという。

70年代に入ると文化祭は日本各地で頻繁に行われたが、とくに1976年にはその回数が一挙に増えて、じつに二十八回もの文化祭が全国で実施されている。77年には四回、78年には六回が行われている。この時期が「五二年路線問題」の前後に当たることが注意されるべきであろう。

70年代に入ると創価学会が成熟期に達したことはすでに述べたとおりである。会員数では七百五十万世帯を越え、「完成期」に入ったことが、会長の池田によって宣せられた。この時期の創価大学の開学、正本堂の完成、広布第二章の開始などについてもすでに述べたとおりである。ところが、77年になると宗門との関係が緊張し、結局79年には池田の会長勇退という事態に帰着する。つまり、70年代の中後期、創価学会は危機に直面していたとすることができるだろう。

そのような状況下、文化祭は非常に頻繁に開催されたことが分かる。文化祭は、「完成期」に入りながら間もなく危機に直面した創価学会が、会員の結束を確認し団結をはかる機会として、非常に重要な機能を担ったのである。また、文化祭が最初は青年部の体育大会から始まったことを紹介したが、文化祭は若い世代の会員のエネルギーを受け止める、他に代替のない組織活動の媒体となった点も指摘できるだろう。

1978年8月に「'78新潟県文化祭」が開催されしばらく中断があつて、1981

年6月にシカゴで「第一回世界平和文化祭」が行われた。前年秋の「カプチャー・ザ・スピリット」参観後、池田がすぐに「世界平和文化祭」の開催を提唱したことを紹介したが、池田はそのとき、おそらく「危機」に対処する方策として文化祭のポテンシャルを再認識したからではないだろうか。

日本には存在しないような民族集団間の深刻な葛藤に苦しむシカゴにおいても、異体同心の可能性を垣間見させる「カプチャー・ザ・スピリット」が、池田の胸中に創価学会伝統の文化祭を呼び起こし、その拡大版として「世界」平和文化祭の着想を得させたのではないだろうか。

それは、創価学会の会長を退いた池田であったが、SGI 会長としては健在であり、今度はSGI 会長として世界広布の指揮を執ろうという決意が、心中に芽生えていたことと呼応し、その思いが世界平和文化祭の構想につながったとも考えることができるかもしれない。

すでに述べたとおり、SGI は 1975 年 1 月にグアム島において世界 51 カ国・地域の 158 人の代表の合意によって発足していたが、ただちに活発な活動を開始したのではなかった。コンスタントな活動が開始されたのは、1980 年秋、第一回 SGI 総会がロサンゼルスにおいて、48 カ国・地域から一万五千人の出席者と来賓三百人を集め開催されて以降である。「カプチャー・ザ・スピリット」の五日後のことであった。

21. 第一回 SGI 総会開催

1980 年秋のアメリカ訪問においては、池田が SGI 会長として行った活動が目立っている。SGI の結成以来、このときまで池田の詳細な年譜(年譜 2005・2011)にも“SGI”の名はほとんど認められないが、10月16日にはサンタモニカにおいて「SGI 親善代表者会議」が行われ、翌日は「第一回 SGI 総会」が開催され、また18日にはマリブ研修センターにおいて「第一回 SGI 総会記念交友会」も行われている。

80 年秋の旅程の最初の訪問先であったホノルルで開催された「アメリカ広布二十周年記念ハワイ総会」の席上で、池田は「来年に予定される第二回 SGI 総会は、この地で開催することに内定した」と述べているので(池田 2008:68)、

SGI 総会を定期的を開催することは、会長勇退後の路線として、すでにこのときには方針として定められていたことが分かる。

SGI 総会は、第一回がロサンゼルスで開催されると、その後、80年代以降、そして二十一世紀の創価学会とSGIの基軸行事として継続していく。1991年に宗門と袂を分かつと、おそらくその重要性はいつそう増したのだと思われる。²⁹

80年代以降は、一つにはSGI総会、そしてもう一つは世界平和（青年）文化祭が、第一次宗門問題から第二次宗門問題を経て、そして「魂の独立」へ向かう創価学会が結束を保持し、SGIとしてアイデンティティを確立するために、決定的に重要な組織イベントとなったのだと思われる。

1980年秋の池田訪米がNSAに与えた影響は非常に大きかった。そのとき池田とウィリアムスは同じ方向を向いていたようにみえたが、どうやら二人が見つけていたものは、別のものであったと考えたほうがよさそうである。

先述のように、池田は会長勇退後の難局にあつて、どのように創価学会を維持発展させるのかという切迫した課題に直面していたはずである。そして、そのときSGIという組織とSGI会長というタイトルがきわめて重要な意味をもって浮かび上がってきたのではないかと指摘した。

ウィリアムスには、フェイズ2によって生じた眼前の混乱を收拾したいという思いが最優先の課題であった。しかし、彼は旧来の路線に復帰する以外のヴィジョンを欠いていた。なぜなら、彼にとって広布とは組織活動への挺身、つまりコンベンションと折伏に邁進すること以外のオプションが思い浮かばなかったからである。

したがって、池田が第一回SGI総会の前日に開催されたSGI親善代表者会議において、以下のように述べた真意が、ウィリアムスに届いたとは思えない。

創価学会は、日蓮大聖人の仏法を根底として、平和、文化、教育を志向し、推進してきた。その結果、皆さん方の最大の努力によって御本尊を信受する人が、世界の九十数カ国におよんでいることをご報告しておきたい。

世界各国のSGIメンバーは、あくまでも御本尊を根本に、その国、その市民のためにつくしている。その国の文化・風俗や法律を尊重しながら、よき

²⁹ 1980年以降継続し（2001年を除き）、2005年11月に東京において第三十回SGI総会が開催されたことが確かめられる（60カ国・地域の参加）。

市民として貢献してきている。今後ともその行き方に変わりはない。

それぞれの国の活動に主体性があるのは当然である。ただし、日蓮大聖人の一閻浮提いちえんぶだいの大仏法は世界平和、全人類の救済という大目的がある。私どもは、同じ大聖人の子どもとして、門下として、また地涌の眷属として、すべて平等であり、民族を超え、国境を越えて、平和を願う一大源泉となる勢力である。その私どもがたがいに交流し、横と横の連帯を強めつつ前進することは、世界平和への心情の発露であり、昇華であるといつてよい。(池田 2008: 85)

池田は、このときまでに世界九十数カ国・地域にメンバーを擁する SGI は、御本尊を根本として日蓮大聖人の大仏法に則って世界平和と人類救済を目的とする連帯を進めていると述べると同時に、あくまでもその国、その市民のためにつくし、その国の文化、風俗、法律を尊重し、よき市民として貢献すべしと強調している。それはまさに「随方毘尼」の原理に従うということであり、市民社会のモラルと違わぬ常識人であることを要請している。

つまり、NSA が位置するアメリカ合衆国においては、自由主義を旨とし個人が尊重され、政府や国家のみならず組織体が民主的に運営されるべきことが社会規範として課せられるのであるから、NSA もまた当然それに従うべきだというメッセージとなっているだろう。

ところが、ウィリアムスの琴線に触れ、そして彼が即座に反応し行動に移したのは、この翌日の第一回 SGI 総会の席上での池田の挨拶に対してであったと思われる³⁰。「世界広布へ力強い第一歩」と題されたその一節に、ウィリアムスはおそらく我が意を得たりと膝を打ったのではないだろうか。

今までのコンベンション、文化祭等は、まことに立派な路線であった。それは信心を根本にして、このアメリカ社会に大きな認識をあたえたからである。これからもアメリカ広布という信心の飛躍のために、おおいに文化祭、総会を催してほしい。そして、アメリカの人々に大きな希望をあたえていただければ、と思う。(池田 2008: 86)

³⁰ 第一回 SGI 総会は、ロサンゼルス市のシュライン公会堂で開催され、四八カ国・地域から来賓三百人と一万五千人の参加者があった (年譜 2011: 98)。

「これからも・・・おおいに文化祭、総会を催してほしい」という、池田のコンベンション路線への手放しの礼賛ともとれるこの一節が、フェイズ2の開始以来、晴れることのなかったウィリアムスの心の暗雲を一掃したのであろう。そして、自信を取り戻したウィリアムスによって、先述のようにこの翌年以降、1990年2月に至るまで、コンベンションの復活と大量折伏への再傾倒が出来した。

NSAの80年代は、70年代の再来となった。強い言葉で言い換えれば、ウィリアムスはフェイズ2の精神から学ぶことが出来なかった。したがって70年代の失敗を80年代も繰り返すことになったのである。

第一回SGI総会での池田の挨拶は、一見したところでは、70年代のコンベンション路線を全面的に肯定し支持しているようにとれるが、このときの訪米での池田の一連の発言を精査してみると、けっしてそうではないことが浮かび上がってくる。

すでに前日のSGI親善代表者会議での挨拶については紹介したが、第一回SGI総会の翌々日に行われたNSAの代表幹事らと懇親会では「正道の信心には組織が必要」と題して次のように述べている。

私どもの世界も大きくなると必ずエゴから組織を利用し、破壊しようとする人が出てくるものである。しかし、広宣流布のための組織は絶対に守らなくてはならない。

……………中略……………

われわれの世界は信心の世界である。だから正しい信心であるか、えせ信心であるかが問題になる。ともかく元品の無明を断ち切る利剣は信心しかない。信なき悪友に決して自身の正道の信心をふみにじられてはならない。そのためにも一つの次元として組織が必要になってくるのである。

妙法という法のもとにある組織とはいえ、凡夫である人間の集まりであるから、善の面と悪の面とがあるかもしれない。しかし、信行学を追求し、深め、拡大していくためには、どうしてもたがいに励ましあう組織が必要になってくる。とくに建設期においてはそうである。現に組織がなかったなら、今のわれわれの信心はなかったかもしれない。

組織があったがゆえに、信心を知り、教学を学び、折伏も実践した。それは、組織の偉大な善の面とあってよい。その半面、組織悪の面は、皆で話しあい、是正し、進歩させていく方途をつねに考え、努力すべきである。決して、悪の面のみをみて組織否定を即断すべきものではない。(池田 2008:87-8)

池田は、NSA においてフェイズ2路線がなぜ生じ、またそれが何を問うたのか、日本にありながら微細に観察し客観的に分析しているように思われる。

つまり、アメリカ合衆国において広布をすすめることができたのは、なによりも組織を確立できたことにあるとその重要性を指摘するとともに、信行学を追求するための基盤として組織の必要性を再確認している。

しかし、凡夫である人間が集まり作りあげる組織は、ときに誤るものである。組織悪という側面が不可避免的に生じることも同時に看破している。これは、一般論として述べられているのではなく、この言辞が述べられた文脈を考えれば、このときまでの NSA について直言しているのである。

しかしながら、だからといって、古い諺を用いれば、産湯のタライの湯といっしょに赤子まで流すような愚は避けるべきだと、19日の「正道の信心には組織が必要」では強調している。

NASの歩みに誤りが生じたことも率直に指摘しながら、同時に、NASという組織がなければ、アメリカ広布は今までもそうだったし、またこれからも進展はありえないと述べ、フェイズ2路線の行き過ぎに言及し、「皆で話しあい、是正し、進歩させていく方途をつねに考え、努力」してゆこうと呼びかけている。

おそらく池田は、フェイズ2の精神がアメリカ合衆国社会の価値規範と合致することを尊重するがゆえに、16日のSGI親善代表者会議におけるような発言をし、また他方では、フェイズ2の行き過ぎも批判したのであつたらう。

16日、17日、そして19日の三日間にわたる池田の発言を吟味してみると、「今までのコンベンション、文化祭等は、まことに立派な路線であつた」という言葉は、無前提にコンベンションを賞賛するものでなかったことがよく理解できるはずである。

つまり、池田は、1980年秋、「カプチャー・ザ・スピリット」によってコンベンションや文化祭を通じての組織活動のポテンシャルの高さを再確認し、81年以降、NSAのみならず創価学会、そしてSGIの活動の一つの軸としていこう

と考えたと思われるが、その意図は、あくまで組織の維持と団結に資する方便、あるいは「化城」であるという認識と評価があったはずである。そして、そういう認識と評価は、遅くとも1975年夏の「ブルー・ハワイ・コンベンション」の閉幕のときには示されていたことをすでに紹介した（池田2010：196-7）。

ところが、ウィリアムスは、75年以降も、また80年以降も、コンベンションや他の根こそぎ動員型の活動についての、池田の認識や評価が結局理解できなかったのだと思われる。だから、「今までのコンベンション、文化祭等は、まことに立派な路線であった」、「おおいに文化祭、総会を催してほしい」という言葉だけが、いつも都合よく彼の耳に飛び込んで来たのである。

ともあれ、このような次第でコンベンションは復活し、ウィリアムスも蘇生した。1980年秋以降、そしてさらには翌年6月の第一回世界平和文化祭の開催の後、NSAは昔日の折伏路線に復し、その勢いをすっかり取り戻すことになる。

80年代初のウィリアムス体制の再起動を、このときのNSAのある副理事長は、「アメリカ（NSAのこと—筆者注）はこれからファナティックをやっていくんだ。でも、やらないきゃいけないんだ」とシニカルに語ったという。この言葉は陰影に富んでいて、一意的な解釈が難しいところがあるが、おそらく、フェイズ2以降の暗雲を払い、NSAが前進するために、今はまだアメリカにおいては、やはりウィリアムス理事長によるコンベンションと大量折伏路線以外には選択肢がないという、幾分かは嘆息も混じるコメントであったように思われる。

またこのコメントには、日本においては宗門問題を振り切り、新しい時代を切り拓くために、SGI総会と世界青年平和文化祭を前面に押し出し、SGIの基軸として創価学会を駆動していく、そういう新しい展開にアメリカのNSAも連なるのだというヴィジョンも込められていたかもしれない。

22. 気高く、王者のごとく

すでに何度も指摘したように、1980年秋の池田のアメリカ訪問は、NSAと創価学会にとって大きな転換点となった。その意味は、日本における創価学会とアメリカのNSAにおいて異なるところがあったが、このときが80年代以降、“SGI”が全面に押し出される路線へのターニングポイントとなっていった。

その1980年の池田アメリカ訪問のクライマックスは、やはり「カプチャー・ザ・スピリット」であったと思われる。1980年秋のシカゴを回顧すると、創価学会とSGI、そしてNSAが歴史の十字路上で交差したような光景として浮かび上がってくるかもしれない。

アケミ・ベイリー・ヘイニーは、2013年9月に全米婦人部長に任命された。アケミとその家族の歩みは、「カプチャー・ザ・スピリット」の意義を一身に体现したような軌跡を描いている³¹。シカゴに縁の深い彼女の人生をたどるとき、アメリカ合衆国に根付いた日蓮仏法の姿を鮮明に描くことができるようである。

アケミの母、サチコは幼い日から苦勞の絶えない生活を送ったが、十四歳のとき広島で被爆し、おばを始め十七人の近親者を失った。この経験によって、サチコは小さな胸に平和の尊さを深く刻んだという。

戦後、看護師になって神戸で病院に勤務していたとき、朝鮮戦争に従軍し傷を負った米軍兵士の入院患者のルロイ・ベイリーと知り合った。まだ二十歳であったが、ルロイに毎日のように求婚され、周囲には反対されたが、結婚を決意した。

1952年、アメリカ合衆国深南部のルロイの故郷に住むことになったが、そこでアフリカ系住民に対する深刻な差別を経験した。英語はほとんど分からなかったが、初めて覚えた英単語は、KKKや暴徒(mob)、リンチなどという言葉だったという。

インディアナ州ゲーリーに引っ越したあと³²、七人の子供たちに恵まれたが、生活の困難と悩みは尽きなかった。ルロイは学歴がなかったのでフルタイムの仕事に就けず、その鬱憤を酒やギャンブルにぶつけた。家族は経済的に困窮したばかりか、ルロイの家庭内暴力に脅える毎日を送っていた。そんなとき、ある日本人女性から創価学会と“南無妙法蓮華經”を紹介されたのである。

サチコは自分が衰れで、日本に帰りたくて仕方なかったが、“南無妙法蓮華經”と唱え続ければどんな困難にも打ち克つことができると聞いて、七人の子供たちのためにアメリカで耐え忍んでみようと思った。そうすることで、聞いたことが本当かどうか試してみることにしたのである。それは1965年7月のことで、

³¹ アケミとその母サチコについては、WT, Oct 11, 2013, p.1/5. および、LV, Dec, 2013, p.6-11による。アケミの全米婦人部長の就任にあたっての特集記事である。

³² ちなみに、インディアナ州ゲーリーは、シカゴから50キロほど南東に位置し、車で一時間ほどの距離である。

彼女はこのとき御本尊を受持している。

信心を始めた後すぐに生活や家庭の状況が好転したのではなかったが、気持ちが変わったのだという。他者に対する思いやりや同情の念が湧き、ルロイの苦悩もよく理解できるようになったのだという。そうすると不思議なことに自分自身を哀れに思う気持ちが消えていた。

娘のアケミは、その当時の自分自身や家族に起こった変化をよく覚えている。母の変化にくわえ、アケミのなかではなにより自己肯定感が得られたことが大きかった。

家では父の虐待に苦しんでいたが、学校も辛かった。黒人の子供からはアジア人であると名指され、白人の子供からは黒人であると嫌われた。耳慣れない「アケミ」という日本名もいじめの素となった。だから、教室で教師から名前を呼ばれても、いつも消えてしまいたい気持ちで机に突っ伏すばかりだった。それが変わることもできたという。

NSA のメンバーといっしょに過ごすうちに、次第に自分が受け入れられていると感じられるようになった。メンバーへの信頼とメンバーからの信頼が実感できるようになると、この経験が自己肯定感につながったのだという。次第に教室でも教師の呼びかけに、「はい」と自信を持って答えることができるようになり、自分が「アケミ・ベイリー」であることが誇らしく感じられるようになったのである。

さて、1980年当時、アケミは二十代の初めになっていた。最初は信心に反対するばかりであった父のルロイも、題目をあげ始めて五年ほどたっていたが、この年に「カプチャー・ザ・スピリット」が開催された。アケミは、三人ずつの兄と姉の七人きょうだいの末っ子であったが、当時この七人でルロイのプロモートによって、“Takata” という名前のモータウン・スタイルのバンドを結成していた。まるで「シュープリームス」と「ジャクソン5」を足し合わせて二で割ったような写真が残されている。³³

じつは“Takata” は、「カプチャー・ザ・スピリット」の舞台に立ち、シカゴを訪れた池田の前で演奏を披露している。そして、このときの経験がサチコの

³³ 「モータウン」は、ミシガン州デトロイト発祥のレコードレーベル。ソウルミュージックやブラックミュージックを中心にしてポピュラー音楽のスタイルを革新した。デトロイトは、ゲーリーやシカゴから近いし、ジャクソン5はゲーリーの出身でもある。

一家にとって、運命を変えるターニングポイントになったのであるという。

“Takata” は、アメリカ中西部を縦断するかのようミシガンからテネシーにかけて、ナイトクラブを回って演奏を行い一家の生活費を稼ぎ出していた。しかしながら、そういう生活はその代償に、子供たちを「あらゆる種類の悪徳」にさらすことになったのだという。息子たちは、十代のころから酒を飲みドラッグを使った。

そのような生活を送っていた最中でもあったから、1980年秋、アケミは、池田に間近に会えて非常に嬉しかったが、じつは「顔で笑って、心で泣いていた」のであった。なぜなら、このときアケミは、自分たちの境遇(circumstances)を恥じていたのであると述べている。

ここで、この「境遇」という言葉にアメリカ合衆国の社会的現実が刻印されていることを忘れてはならないだろう。つまり、アケミは、民族や学歴によって帰属する階層の大要が決まってしまう現実と、それに抗うことが難しい、そういう「宿命」を負っている自分たちを恥じていたから、師匠と仰ぐ池田に会っても心の底から明るく微笑むことができなかった。

ところが、そういうアケミたちに思いもかけぬ事態が訪れた。演奏を終えたアケミたちに、池田からすぐに一編の詩が届けられたのである³⁴。それは、次のように綴られていた。

*Royal children,
Sing proudly
Your mother' s song*

アケミは、この詩にとっても深く感動したのであったが、同時に非常に困惑した。なぜなら、池田がどうして自分たちのことを“royal children”と呼ぶのかまったく理解できなかったという。「たしかに私たちは、何ものかではあったろうけど、絶対に“royal”ではありえなかった」とアケミは述懐している。

しかしながら、しばらく経つにつれ、次第に池田がその言葉に込めた思いが分かってきたのであるという。「先生は、私たちの内なる生命力を目覚めさせよ

³⁴ オリジナルは「母の曲 誇りががやけ 王者の子」という句（『聖教新聞』2016年07月06日6面）。

うと、全魂を傾けて励ましてくださったのだ」と気がついて、心の底から“royal”でありたいと思うようになったのだという。池田が言う“royal”とは、けっして王侯貴族ということではなく、誰からも敬われ、また信頼される、そういう人であるということが理解できるようになったのだという。

これが、1980年の秋シカゴで、アケミとその家族が経験した貴重な人生のターニングポイントなのである。

「カプチャー・ザ・スピリット」での経験をスタートラインとして、その後のアケミは、常に御本尊に向かって祈り、信心根本に、困難を糧に生きる姿勢を貫いてきたという。苦勞して大学に入るとコミュニケーション学を専攻し、卒業後はソーシャル・サービスに従事し、またさらにその後は、雇用主のサポートも得て大学院でも学び、修士号と博士号も取得している。

アケミは、これまでに162人に御本尊を受持させた。そういうアケミのなによりの喜びは、悩みがあつてこの信心に結ばれた人たちが、困難に打ち克ち幸せになっていく姿を見るとときであるという。だから「いつもこの仏法を皆と分かち合うことで、私自身の信心がいつより強盛なものになってきた」のだという。

23. 北半球一周と「立正安世界」

NSAの80年代が、再びコンベンションと大量折伏へと回帰したことはすでに述べた。それには背景として、日本において創価学会が80年代、SGIと世界青年平和文化祭などを前面に打ち出して組織の求心力を高め³⁵、臨界点が迫り来る宗門との緊張に備えたという事情があつたと思われる。つまり、ウィリアムスが旧来の路線を復活させることができたのは、そういう日本の事情に積極的に便乗した、あるいは「隙」をついたということができのかもしれない。

80年代、池田はたびたび頻繁にアメリカを訪れている。その折々の訪問の中心となった目的は様々であつたが、この時期池田が、NSAとアメリカの事情を非常に気にかけていたことが訪米の頻度からだけでも読み取ることができそう

³⁵ ちなみに1981年1月1日に、初めて「SGI」の名前を冠した、月刊の国際平和グラフ誌（『SGI』）が創刊されている。

である。

1980年秋の訪米が、ブルー・ハワイ・コンベンション以来、五年ぶりであったことはすでに述べたが、翌1981年には、1月、2月から3月、6月から7月、そして8月に訪米している。つまり、池田はこの年だけでアメリカを四度も訪れている。

その後80年代は、84年2月から3月、85年7月、87年2月と三回の訪米を重ねた。池田は1960年10月の初訪米以来、1996年6月～7月のロサンゼルス・デンバー・ニューヨーク・エルパソ・テキサス訪問に至るまで、二十七回にわたってアメリカ合衆国を訪れている。年譜(2011)を通覧すると80年代の九回にわたる訪米は集中しているが、ことに81年の四回は際立っている。

1981年、このとき五三歳であった池田は、ただアメリカを四回訪問したのではなく、驚くほど過酷なスケジュールの外遊を重ねた。1月13日から28日までホノルル・ロサンゼルスを訪れ、2月15日から3月12日まで北・中米訪問として、マイアミから足を伸ばしパナマ・メキシコを訪れた。その帰路にはホノルルから大阪に降り立つと、20日に東京に戻るまで大阪各地で指導を行っている。

そして、5月9日から7月8日までは、ソ連・欧州・北米の各地を訪れている。ゆうに二カ月間にもわたる長い旅程であった。74年初訪問のソ連には三度目となり、政府要人との会談や文化人との交流を行うなどした。引き続き、西ドイツ、ブルガリヤ、オーストリア、イタリア、フランス、そして、さらに大西洋を渡って、ニューヨークに舞い降り、次いでトロント、シカゴ(第一回世界平和文化祭に出席)、ロサンゼルスを経訪し、六十一日間にわたる日程を終え帰国した。

この「北半球一周」の意義について、池田は後年述懐し、会長辞任を余儀なくされ日本国内の活動も制限されたが、それであるならば「世界から日本を励まそう」と決心したとはっきり述べている。

「立正安国」は今でいえば「立正安世界」である。

世界平和のための行動を引きとめる権利が、だれにあるのか！

自分たちのちっぽけな嫉妬と利害とで、私の足を引っ張って、何になるのか！

しかし、世界の平和のことなど、彼らには何の関心もなかった³⁶

自分たち＝彼ら、とは宗門のことである。会長を辞任してから二年が経過し、このとき池田の心の中に「反転攻勢」の火種が点ったのかもしれない。その火種とは「日本の会長はやめたが、SGIの会長として動くことまで、邪魔させはしない」という決意であったから、世界から日本を励ますとは、SGIとしての活動を全面に押し出すという戦略であり、それは、その年正月に創刊されたグラフ『SGI』の編集方針に明記されたように「仏法を基調とする平和・文化・教育」の尊重という姿勢を明確に打ち出すことになった。

また、このときの池田の世界各地への訪問は、それぞれの地におけるSGIの発展にとって時代を画する大きな出来事となった。アメリカの場合でいえば、シカゴで初めて開催された世界平和文化祭が重要であるが、その意義についてはすでに述べたところである。

シカゴに先立って訪れたニューヨークで、池田は、即興詩「我が愛するアメリカの地湧の若人に贈る」を発表した³⁷。この長編詩は、今日SGI-USAのニューヨーク文化会館の一階ホールの壁面に刻まれている。その詩句から、1981年に池田が、アメリカのメンバーに託した心情が看取できるだろう。

アメリカの青年よ！
 今こそ
 絶対の平和と文化の
 社会への雄叫びを
 勇敢に続けながら
 一步また一步
 一段また一段と
 世界の人々の夢見んとして来たりし
 愛すべき自由の天地アメリカの
 確かなる歓喜と繁栄と
 清新なる人間愛を

³⁶ 「民衆こそ王者」『潮』2016年5月号：99-100。

³⁷ 1981年6月20日にニューヨークで開催された日米親善交歓会において発表された。

今 再び
 断固として
 構築していかねばならない (池田 2008 : 146)

「今 再び／断固として／構築していかねばならない」という連の結びに込められた意味は、この長編詩が紡がれるまでの数年来の、池田と創価学会の、そしてNSAのたどった困難が折り重なった道程を思い起こすことなしには理解できないだろう。

君達よ！
 未来に生きゆく若き君達よ！
 意見の違いがあつたとしても
 確かなる目的の一点だけは
 忘れずに進みゆく君達よ！
 今日も学べ
 今日も動け
 今日も働け
 そして今日も一步意義ある前進を
 明日もまた一步朗らかな前進を
 尊極なる妙法と日々冥合しながら
 社会の泥沼の中に咲く
 蓮華の花の如く
 自己の尊き完成の坂を
 汗をふきながら上りゆくのだ

信仰とは
 何ものも恐れぬことだ
 何ものにも紛動されぬことだ
 何ものをも乗り越える力だ
 何ものをも解決していく源泉だ
 何ものにも勝ち乗り越えていく

痛快なる人生行路のエンジンだ （池田 2008 : 149-150）

「意見の違いがあつたとしても／確かなる目的の一点だけは／忘れずに進みゆく君達よ！」という呼びかけには、まさにフェイズ2による混乱を乗り越えて一回り成長した、NSA の次世代を中心となって担っていくであろう若者たちに寄せる、池田の大きな期待が息づいているようだ。

「信仰とは／何ものも恐れぬことだ」に続く章句からは、フェイズ2のような危機もまた信心によってしか克服できないことが力強く確認されているだろう。

そして、この長編詩の最終連は、以下のように結ばれる。

私は広布への行動の一切を
 諸君に託したのだ
 一切の後継を信ずるがゆえに
 今 世界のすみずみを歩みゆくのだ
 君達が
 小さき道より
 大いなる道を創りゆくことを
 私は信ずる
 ゆえに
 私は楽しく幸せだ （池田 2008 : 152）

1981年の「今」、「世界のすみずみを歩みゆく」池田にとって、「広布への行動の一切を」託したと述べている「諸君」は、けっしてアメリカの若人たちだけに限られていたのではなかった。このとき歴訪した世界各地で広布の胎動や息吹、あるいはその進展が実感できたことが、長編詩の最終行をゆったりとした幸福感で満たしているのだろう。

アメリカの場合であれば、「私は楽しく幸せだ」という、その理由は、六十一日間の世界広布の旅の最後に、7月5日に行われたサンタモニカでのNSAの合同会議の席上での「“次の20年”へ万全の前進」という挨拶のなかで、平易な言葉でパラフレーズされていると思われる。それは、フェイズ2による大停滞

を脱するための明快な処方箋として述べられている。

ともあれアメリカ NSA³⁸は、本格的な信心と組織と人材の再構築をする段階に入ったと思う。そこで、各部の代表が集い、月に1、2回定期的に合同会議を開催していくという、全体の合意にもとづく協議体制を敷いたらどうか。

日本も会長を中心として、的確な合議制のもとに、各部が緊密に関係を取りつつ、総合的に呼吸を一致させながら運営している。と同じく、アメリカも多数の合意を得ながら、深く、広く、大きな前進をはかっていくべきであろう。

当然のことながら婦人部、女子部の意見をおおいに参考にすべきである。またよくがんばった人をほめたたえてあげておいてはならない。また、合同会議等においては、目的のためにおおいに意見を交わすことは当然である。とともに、ひとたび合意で決まったことに対しては、全員でその推進に全力をあげていただきたい。(池田 2008 : 156)

池田は、アメリカの組織において欠けていたものが何であったのか、分かりやすい言葉で具体的に指摘している。合議制、あるいは協議体制が欠落していたのだという厳しい指摘である。また、女性の意見が尊重されるべきだとの指摘には、そうでなかった実態があったことが推測できるだろう。

幹部や職員は、世界文化センターや各方面の会場に集うメンバーに対しては、心からあたたかく迎えるべきである。皆の会館であるからだ。悩める人の信心の依所として、すべての人々が“心から安心できる”というあたたかい雰囲気をつくっていくべきである。決して官僚的になってはならない。

広布の機関紙である「ワールド・トリビューン」は、皆で愛読しながら、広げ宣揚し、大切にしていけるべきである。機関紙は、すべての「信心」と「広

³⁸ 引用している池田(2008:156)では、「NSA」でなく「SGI」と記されているが、これは同書の凡例にあるように同書の出版時に統一されたためである。この当時は、まだ「NSA」である。

布」の推進力であり、伝播であり、その教団の生命力であるからだ。（池田 2008：157）

ここでも池田は、日本の創価学会のあり方を基本型として再確認している。会館の意義は、昭和五十二年路線として宗門から問題視された「仏教史観を語る」のなかでも、「本音」としてストレートに強調されていたし、また、宗教教団における、新聞（機関紙）の重要性は、戸田の教えとして池田のなかにしっかりと相承された“DNA”である。これら二点は、池田にとって宗教組織の要となる必須の二大要素であると捉えられていて、アメリカにおいても遵守すべきであると述べられているのである。³⁹

また、「決して官僚的になってはならない」という指摘も、池田が組織の運営原理を説くときに長年にわたって繰り返す肝要なポイントなのである。その指摘は以下のように続いている。

役職の上下にかかわらず、すべてのメンバーがたがいに信頼し、理解し、つつみあいながら進んでいただきたい。ここに仏法の仏法たるゆえんがあるからだ。

幹部はつねに率先して仏道修行していくとの自覚を忘れず、包容力をもっていたいただきたい。すぐに善悪をきめつけ、排除していくことはまことに愚かなことである。

われわれはおたがいに仏様の子どもである。尊い使命のある人である。信心のことで、またその人を思う心で、親が子をしかるようにする場合があるであろうが、決して感情でしかってはいけない。

ただ、包容力があればよいとして放置しておけば、傲慢になったり、組織を攪乱したり、法を下げたりするような場合がある。そうした行為があった場合は、信心の眼を開かせるために指導しなければならないことは当然である。これらの立て分けを賢明に判断していただきたい。

³⁹ 「仏教史観を語る」（池田 1977 b）については、第 18 節も参照のこと。機関紙、つまり聖教新聞の発刊の経緯とその意義について、戸田・池田の師弟の託した思いについては、例えば『聖教新聞』（2016 年 4 月 19 日 3 面）を参照のこと。

「なぜ」という問いの重要性を、幹部は忘れてはならない。いずれの行為においても、その「問い」に明確な「解答」がなければ、人々は心からの納得もできないし、また大切な目標への行進も鈍ってしまうからだ。とくに欧米の思考法として帰納法的論理を無視できないからである。

形式主義だけでは愚かである。ささいな形式を重んずるあまり、メンバーに窮屈な思いをさせてはならない。たがいに伸びのびと自由に活動し、生活し、人生をエンジョイしながら信心の成長をはかっていただきたい。

われわれ学会の使命である広布の大精神を継承していくことの重要性、大切さは当然の理とあってよい。

その原則のうえに立ってアメリカはアメリカらしい伝統を築き、たがいに討議と試行錯誤をかさねながら、理想的な運営、会合等のあり方をつみあげていていただきたい。(池田 2008 : 157-8)

このときサンタモニカにおいて池田が述べた内容を、これ以上、一つ一つ取り上げて吟味しないが、この挨拶が述べられた時期や状況を考えると、それらが何を想定して述べられたのか、すでに何度も指摘したように明らかであると思われる。

24. 「魂の独立」

1981年は、NSAにとっても大きな区切りとなったが、池田と創価学会にとっても第一次宗門問題以来の転機の始まりとなった。時系列的に出来事を整理すると、5月から7月の池田のヨーロッパと北米訪問の日程の中で第一回世界平和文化祭が開催され、アメリカで五番目となる正宗寺院の妙行寺（シカゴ）が落慶している⁴⁰。8月には第二回 SGI 総会がホノルルにおいて開催され、これ

⁴⁰ アメリカの正宗寺院は、1967年に（ハワイ）ドーセット・本誓寺、LA近郊のエチワンダ・妙法寺、1972年にワシントンD.C.・妙宣寺、1980年にNYの妙説寺、1981年にシカゴ・妙行寺、1984年にSFの妙信寺、が落慶している。

以降毎年継続して SGI 総会が行われるようになった。すでに指摘したように、この後、世界（青年）平和文化祭と SGI（総会）路線が定着していった。

じつは、7月中旬になって転機の呼び水となる出来事が生じた。池田が「北半球一周」から戻った直後、池田を継いで第四代会長に就任した北條浩が急逝してしまう。副会長の秋谷栄之助が第五代会長に就くが、名誉会長の池田が、再び、創価学会の「すべてを守り支えていかなければならない」立場に復権することになったのである（『聖教新聞』1982年2月9日1面）。これは大きな出来事はあったが、それでもこの時期の創価学会は、おおむね宗門と宥和的な路線を継続していた。

1981年の年末から年明けにかけて、池田の地方指導によって大分や秋田など地方から、いわゆる「反転攻勢」の狼煙が上がったが、その後も創価学会は昭和五十二年路線への反省を保っていた。宗門との関係が一時軟化したことは、1984年正月に池田が法華講総講頭に復任したことにも明らかであったが⁴¹、その年三月には大石寺開創七百年（1990年）を記念するために、新たに寺院二百カ寺を建立し宗門に寄進することが発願されたことに端的に表れていた⁴²。

このときの発願は、池田が法華講総講頭に復任させてもらったことへの返礼の意味があったが、「それ以上に、以後、創価学会側に多少のことがあっても宗門が苦情を言えない雰囲気づくりに役立った」という。「そして、その直後から、宗門に対する創価学会の態度に変化が現れた」という（西山1998:124-5）。

西山茂は、1985年の初頭から創価学会の宗門への「再度の挑戦」が開始されたのであるという。そして、「再度の挑戦」から1991年11月の「破門」までに、次のような四段階があったと指摘している。

つまり、（一）昭和五十二年路線の用語復活期（1985・86年）、（二）黙示的な権威権力批判期（1987・88年）、（三）対決準備期（1989年1月から90年6月まで）、そして（四）明示的な宗門批判期（1990年7月から91年11月まで）の四段階であるという。以下、西山にしたがって概観してみよう。

（一）この時期、昭和五十二年路線で試みられた在家主義的な宗教様式への革

⁴¹ 1978年末、池田は宗門との関係悪化によって法華講総講頭を辞任していた。

⁴² 「新寺院二百カ寺建立計画」は、1985年末時点で28カ寺まで落慶し、1990年末までで111カ寺が落慶した（年譜 2011: 466・882）。なお創価学会の宗門への寄進寺院の総数は356カ寺に及んだ。

新を、創立六十周年にあたる 1990 年までのこの五年間で必ず成し遂げることが、やや婉曲な表現であったが打ち出された。盆彼岸の寺院への参詣や塔婆供養に代わって、日常信行こそが肝要であると強調され、かつて問題となった「民衆仏法」や「信心の血脈」などの用語が、再び聖教新聞などに登場するようになった。

- (二) この時期は、いっそう昭和五十二年路線の復活がすすめられ、例えば、三代会長を範とする「師弟」直結や、学会もまた「和合僧」の団体であることなど、特徴的な用語で強調されることになった。また、従来は「謗法」とされていた盆踊りや夏祭りなどの地域の伝統行事や祭礼への参加も認められるようになった。しかし、この時期の最も大きな特徴は、池田が「黙示的に」宗門の法主や僧侶の批判を行うようになったことであると西山は指摘している。それは、例えばこの当時すでに衛星配信されていた本部幹部会などでのスピーチのなかで、ときに表情や身振り手振りをもって示されたという。
- (三) この段階になると、来るべき「第二次宗創戦争」に備えた準備態勢の確立が目指されたという。たしかに、1989 年正月に池田が聖教新聞に寄せた、「法難に また法難の 幾歳か／大聖しのびて 新春迎えむ」という新年の歌には、ある種の決意が満ちていたと充分解釈できるだろう（年譜 2011 : 685）。またこの時期は、創価学会の登山方針の変更（日帰り登山の励行）によって、宗門経済への影響（宿泊者減少・丑寅勤行参加者の減少）が宗門の不満を募らせ、また逆に、宗門による塔婆供養料や冥加料の倍額への値上げなどに、創価学会側も不満を強めたという。この段階になると、このような経済的利害の対立も顕著になっていった。
- (四) 第二次宗門問題、あるいは「第二次宗創戦争」が発火したのは、1990 年 7 月のことであった。7 月 3 日付（戸田城聖の出獄記念日）の聖教新聞社説は、『『民主の時代へ』、歴史的な大潮流の中で迎えた 7 月 3 日。民衆の団結が勝つのか、それとも権力の策謀が勝つのか』と述べたというから、このとき明示的な宗門批判を行う決断がなされていたことがうかがわれる（西山 1998 : 128-9）。7 月 17 日に開かれた宗門と学会の連絡会議の席上で、秋谷会長が「本日は宗門に対して、日頃思っていることを言わせていただく」として（西山 1998 : 128）、僧侶の生活が派手

になっていることを指摘し、綱紀肅正を申し入れたという。また、池田名誉会長が大石寺に日顕法主を訪ねた際、法主が寺院寄進の進捗状況の遅れを難じたことなど、実務的な問題がふさわしくない場へ持ち出されたとして学会側が苦言を呈した。翌18日には、日顕法主は、「創価学会分離作戦」（池田名誉会長を追放し、学会員を檀徒化させる作戦）の名称を「C作戦（CUTの頭文字）」と命名し、7月決行を頑強に主張したというが、前日の学会との連絡会議でも指摘された宗門僧侶の腐敗墮落という不安材料があり、僧侶側の綱紀自肅を固めたうえで攻撃に転ずべしとの意見が出され、結論は持ち越されたという。しかし、日顕法主は、池田名誉会長を懲罰含みで追求することを決定し、21日に池田名誉会長・秋谷会長と面談した折り、17日の秋谷会長の発言をめぐって、「法主の発言を封じた。驕慢だ！驕慢謗法だ！」と大声で怒鳴り、名誉会長の池田に対しても、「あんたにも言っておきたいことがある。懲罰にかけるから！」と恫喝したという。8月になると、日顕法主は創価学会に対抗していくために綱紀自肅が必要であることを訴え、宗門は「末寺僧侶・寺族の綱紀・自肅に関する基準」を発表した。ところが、すぐ翌日に、日顕法主は自らが通達したばかりの綱紀自肅を破り、伊豆長岡の超高級旅館で豪遊したことが発覚する（年譜2011：883）。これ以降、「第二次宗創戦争」は、半ば公然化するが、90年秋になると、大石寺開創七百年慶祝記念文化祭や同慶讃大法要が行われたので、いったん小休止した。

しかしながら、完全に沙汰済みとなったわけではなかった。池田は、慶讃大法要の本会（10月13日）において祝辞を述べているが、そのなかで「多くのいわゆる伽藍（がらん）仏教が、自宗の権威と権力におぼれて、信徒を小バカにし、民衆を見くだし、軽視してきたがゆえに、その活力も発展もなくなっていったことは、周知（しゅうち）の歴史的事実であります」と述べたという（『聖教新聞』1990年10月14日2面）。西山は、これを「間接的ではあるが誰にもわかるかたちで、公然と宗門批判を行った」とコメントしているが、けっして「間接的」であったとは思えない。慶讃大法要の本会における祝辞に織り込まれた文言であることを考えれば、それは宣戦布告にも似た響きを持ったのでは

ないだろうか。

これ以降の第二次宗門問題の詳細は、本稿のテーマから離れていくので概略にとどめるが、最終的に1991年の終わりまでに両者の決裂は決定的なものとなる。1991年に入ると、宗門は、学会からの脱会者を直属の信徒として積極的に受け入れることを決定したり、SGI以外の海外信徒組織を認めないという従来の方針を一方的に廃止する通告を行い、海外で檀徒づくりを試みた。六月になると四十年間に及んだ月例登山会が終了した。1952年10月4日の第一回開始以来、延べ七千万人が参加したという（年譜 2011：885）。

また、重要なことは、この年より戒名・僧侶抜きの「学会葬」「友人葬」（4月以降）が開始され、盆彼岸の精霊回向は塔婆を立てず学会の会館で行われるようになったことがある（7月）。西山茂は、この時点で「革新の程度は一挙に「第一次宗創戦争」当時の水準を超えるにいたった」とコメントしている。

11月28日付の宗門からの「破門通告書」が、翌29日に創価学会本部に到着したが、それには、いまや創価学会は「大謗法団体」と化したので、以後、日蓮正宗とは無関係とする旨が記されていた（西山1998：132）。

それに対し、創価学会は秋谷会長らが記者会見し、この「破門通告」によって学会が何ら影響を受けることはないこと、さらにまた、宗門の画策を破折し、学会は今後とも日蓮仏法の正統として前進していくと述べた。

11月30日には「創価ルネサンス大勝利記念幹部会」が開催され、池田は、学会にこそ大聖人の仏法の正統があると語り、「破門通告」のあった11月28日を「魂の“独立記念日”」として位置づけた。

池田は、この日を記念して、「天の時 遂に来たれり 創価王」と詠んでいる（年譜 2011：978）。「創価王」とは、学会員の全員が信仰の王者であるという意味であるという（『聖教新聞』2016年12月10日4面）。この句には、強い決意とその決意に基づいてとった行動の結果として、宗門の軛を断ち切ったことへの深い満足が込められているようだ。

25. 一九九〇年二月—ロサンゼルスの一十七日間、その一

1980年代を通して、より正確には、第一次宗門問題から第二次宗門問題をへ

て「魂の独立」にいたる十余年以上は、池田と創価学会にとって極めて多事多難な時代であった。その産みの苦しみをへて、創価学会は「在家主義的な宗教様式の革新という所期の目的」（西山 1998：132）をおおよそ達成できたが、その間、アメリカのNSAはどのような日々を過ごしたのだろうか。

すでに何度か指摘したように、一言でいえば、ウィリアムスNSA理事長はフェイズ2の反省を深めることなく、結局、それ以前の路線に立ち返っていった。1981年までの事情は紹介したので、それ以降の概略を記そう。

1982年には第一回の全米男子部総会（イースト・ロサンゼルス）が開催され、全米から五千名が参加した。再び、数が尊ばれモノをいう時代が再来した。10月には二万四千人のメンバーを結集し、ワシントンD.C.でコンベンション（「ワシントンD.C.ラリー」）が開催された。一万人が旗手となり星条旗を掲げコンスティテューション・アヴェニューを大行進した。1983年には、第二回の全米女子部総会が開催され、五千人の出演者と六千人の観客が全米からカリフォルニア州アナハイムに集った。

1984年にはダラスとサンディエゴでコンベンションと総会が開かれ、六千人の出演者と二万名の観衆があったという。1985年には第五回世界青年平和文化祭がハワイにおいて開催され、これはハワイでのそれまで二度のコンベンションに匹敵する規模の催しであった。日系官約移民百年記念行事の一環として認められたこのときは、一万三千人が星条旗を掲げカラカウア・アヴェニューを大行進した。

1986年にニューヨークにおいて、マジソンスクエアでコンベンションが開催され二万五千人が参加した。1987年にはシアトルとフィラデルフィアでコンベンションが行われた。また、80年代には日本各地を中心に開催された世界青年平和文化祭に、NSAは千人規模のメンバーを派遣し、豪華で壮麗なショーやイベントを行った。このように1980年代の半ばから後半にかけ、コンベンションと大量折伏路線が再過熱し、その勢いはフェイズ2以前と匹敵するものとなった（World Tribune 1989：14-36）。

NSAが公表したメンバー数は、1975年から80年までは25万人と変わらなかったが、81年に26万人、82年には29万人、83年には33万人、84年には40万人、85年には45万人へと膨張した（ウィリアムス 1989：306）。

88年も折伏キャンペーンは続いていたが、微妙な変化が生じつつあり、総会

とコンベンションの開催方式が変化した。フェイズ2の後もしばらく続いた方式のように会場を分散しての開催となり、全米の八つの総合方面(joint territory) ごとに開催された。それでも、ロサンゼルス・ジョイント・テリトリーでのコンベンションには二千五百人のメンバーが一堂に会し、サインボードを使って絵文字や図形を描き出す大パフォーマンスを繰り広げられた。

89年の総会は、本部(headquarter) ごとの分散開催となり、コンベンションは開催されなかったが、この年のブッシュ大統領就任を祝う慶祝行事をNSAも盛大に執り行った。前年も含め、コンベンション型の大量動員と折伏キャンペーンは継続していたが、88年と89年を振り返ると、潮目が変わる予兆があったと思われる。

1990年2月になると大きな出来事があり、NSAは一挙に路線を転換する。

創価学会はこの年を「原点・求道の年」と名付けたが、その2月中旬、池田は二十二度目となる訪米を行った。

池田は2月12日に成田を発ったが、当初はロサンゼルスだけでなくブラジルなど南米諸国の訪問も予定されていた。池田の長男の博正は、予定変更にもなつて名代に指名され、急遽ブラジルへ向かったことを著書に記している(池田博正 2008:82)。また、ワールド・トリビューン の五十周年記念号には、「正念場(a critical juncture) にあったNSAのため」、池田が南米行きをキャンセルしてロサンゼルス滞在に充てたと述べられている(WT、2010年10月2日:17)。

このときのロサンゼルス滞在は十七日間におよび、ほとんど連日のように会合が開催され、幾重にもおよぶ池田の指導が行われたことがきわめて異例であった。この池田の集中的な指導によって、NSAは体制を改めることになる。

この訪問の時期が、創価学会の歴史においていかに重大な局面であったかについては、すでに注意を促しておいた。まさに「正念場」を迎えつつあったのは、創価学会本体であったかもしれない。したがって、この直後の宗門との「決戦」に備え、その前に懸案となっているNSAの問題を解決しようという思惑が働いたかもしれない。いずれにせよ、このような状況のなかで、池田は半月以上もロサンゼルスに留まり、連日アメリカのメンバーの指導に身を挺したのである。

2月14日付の聖教新聞は、第一面でこの訪米を大きく取り上げている。「共々

に大白法の広宣流布を」と大書され、「すばらしき仲間 すばらしき前進」「世界のNSA」の建設」という文字が躍り、「SGI 会長、ロサンゼルスに到着」と見出しが付けられている。記事によれば、「ロサンゼルスに到着するや、ただちに研修が始まった」という（『聖教新聞』1990年2月14日1面）。

マリブ研修センターで行われた第一回目の研修は、12日正午から開始されたというから、11時に到着したロサンゼルス国際空港から移動に必要な所用時間のみをおいて、「NSA 各部合同研修会」が開催されたことがわかる。そして、正念場にあつたNSAの研修会に到着するやいなや、池田がただちに述べたのは、以下のような指摘であった。

最初に、「今回は南米三カ国も訪問する予定であったが、アメリカが大切であるし、アメリカに力点を置いて、南米には代理に行ってもらふことにした」（『聖教新聞』同上）と前置きし、

真のリーダーは、友を守り、ほめたたえ、包容していける人である。反対に、組織上の立場を利用して、人を叱ったり、威張ったりするリーダーは、仏子を苦しめるばかりでなく、将来、自分自身が苦しむことになる。ゆえに、そういう指導者をつくってしまえば、たがいに不幸となる。そうであつてはならない。信心の世界は、つねに成仏と幸福のためにある。（池田 2006:24）

このとき冒頭、池田は、三年ぶりでアメリカを訪問し、「懐かしい皆さま方にお会いでき、本当にうれしい」と語り、続いて時候の挨拶や今回の訪問予定の概要や、あるいは会談予定者の紹介なども述べているが、上掲のように、十七日間の滞在最初の発話として、ある種そぐわない指摘を行ったが、それは逆に、ズバリと本論に切り込んだと考えるべきなのかもしれない。

池田の十七日間のロサンゼルス滞在スケジュールは、一分の隙のなく編まれ、それだけでも状況の緊迫ぶりをうかがうことができるようだ。12日に到着後すぐに上掲のNSA 各部合同研修会に出席したあと、十七日間にじつに十五回にもおよぶ会合に出席し、必ず挨拶やスピーチを行っている。なかには、かなり長時間にわたる御書や法華経の講義なども含まれている。

2月12日から28日までの滞在中、会合が行われなかったのは16日と23日だけである。しかし、その両日とも休息に充てられたわけではなく、著名な実

業家のオキシデンタル石油会長のアーマンド・ハマー（16日）、ノーベル化学賞およびノーベル平和賞を受賞したライナス・ポーリング（21日）、ジャーナリストで核兵器廃絶運動などにも貢献したノーマン・カズンズ（23日）と対談を行っている。この十七日間のスケジュールは、非常に緊密なものであったことが分かる。

ロサンゼルス到着二日目の13日には、「NSA 三十周年記念代表者会議」が開催され、池田は「千年の仏法共和の基盤をつくれ」というスピーチを行った。この会合の主な出席者、つまり「NSA 代表者」とは最高幹部たち、ウィリアムス理事長・キクムラ主任副理事長・カトウ副理事長、フジオカ・クダマツ・ザイツ・ナカバヤシ・カサハラ・マグロフスキー・ササキ・マツオ・オオハラの各総合方面長、ウィリアムス総合婦人部長、タカクワ副総合婦人部長、エリオット婦人部長、オギハラ・イノアシの両副婦人部長、ナガシマ青年部長、マクレイス男子部長、ヒロタ女子部長であったことが分かる。他に日本から六名ほどの幹部とNSAの約三百人の出席者があったという（『聖教新聞』1990年2月15日1面）。

NSA 代表者のうち、日本人でも二世でもないアメリカ人は、入会時期の早いガイ・マグロフスキー（1943年生まれ、1967年入会）と、1989年に男子部長に任命されたイアン・マクレイス（1953年生まれ、1976年入会）の二名である。

フェイズ2の後、男子部長と女子部長にアメリカ人が任命されたが、体制立て直しのため、日本人が両ポストに復帰していたことはすでに述べたが、1989年になると四者組織の整備が進み、初めて青年部長のポストが設けられダニエル・ナガシマが就任している⁴³。そして、このとき男子部長にはアメリカ人のイアン・マクレイスが就任した。

しかし、四者の責任者、また副理事長と総合方面長の顔ぶれを見ると分かるように、要職の大部分は日本人であるか、あるいは二世の「日本組織原理を斟酌できる能力を備えた」（ウィリアムス1989：295）指導者たちであった。

この日も、池田は、そのような聴衆に向かってスピーチを行っているのである。それは、冒頭、挨拶に立ったウィリアムスのトーンとは明らかな差異がある。

⁴³ ダニエル・ナガシマは、1999年から2015年まで第3代SGI-USA理事長を務めた。なお、第4代理事はアメリカ人のアディン・ストラウスが就任している。

ウィリアムスは、NSA 広布の三十年は、二十二回を数える池田 SGI 会長のアメリカ訪問によってその大発展が築かれたことを感謝すると述べ、今後どこまでも SGI 会長の指導のもと、求道の信心を貫いていきたいとして、慶祝ムードのなかで、十の新会館建設構想を朗々と紹介している。

それに続いて述べられた池田のスピーチは、「私のほうからは、簡潔に五点申し上げたい。」と切り出し、次のように続けられている。(池田 2006 : 25-8・『聖教新聞』1990年2月15日1面)

第一に、「アメリカ広宣流布の千年の基盤」をつくる自覚で、これからも着実に進んでいただきたい。あせる必要はない。早く、簡単にできあがったものは、壊れるのも早い。今は、磐石な基礎をつくりあげる時である。

第二に「人材こそ宝である」という点である。人材なくして令法久住（法をして久しく住せしめる）も、広宣流布もない。

人材はまず見つけることである。石の中に金をさがすように、可能性豊かな存在を見いだす。それから、今度は、その人を全魂で育成することである。

育成の根本は祈りである。この人をアメリカの大人材に成長させたい、と真剣に御本尊に祈っていく。そして、その熱い真心をもって、その人を大切に育てていく。

「千年」先までも見通す指針が提言されているにしても、このあたりまでは、三十周年を祝賀する定型的な挨拶の型を逸脱してないだろう。しかしながら、次第にトーンが変わる。

日本でも、これまで大勢の中には、金銭問題や生活の乱れなどから、信心も墮落し、清浄な和合の世界から去るべくして去っていった人もいる。しかし私は、一人も落後させないという思いで、徹して指導し、激励してきた。牧口門下生も戸田門下生も含めて、皆、徹底して大事にしてきた。その人々が、あらゆる分野で、今では広布の大きな力になっている。

人材は、心から尊敬し、自分以上に偉くしよう、偉くなるのだとの決心で育てることである。後輩を見さげたり、利用したりすることは、謗法の罪に

さえ通じてしまう。人材を育てる人、その人こそが偉大である。その人こそが真の人材なのである。

第三に「楽しい会合」「歓喜と知性の対話」ということである。これを「世界の模範」となっていくべきアメリカの皆さま方のモットーにしていただきたい。

信心の世界は幸せになるための世界である。本来、最高に自由な、最高に楽しい集いである。だれ人にも人を叱ったり、苦しめる権利はない。叱られて、いやな思いをせねばならない義務もない。

「金銭問題や生活の乱れ」「信心も墮落」、また「後輩を見下げたり、利用したりする」ことなどが一切存在していなければ、ここでこのとき指摘されるようなことはなかったはずである。それはまた、「だれ人にも人を叱ったり、苦しめる権利はない」という指摘についても同様であるだろう。

第四に、広宣流布に戦っている人を、尊敬していかねばならない、ということである。

日本とアメリカでは、文化、風土、社会制度などで、さまざまな違いがある。ゆえに広宣流布の進め方にも、当然、違いがあるかもしれない。

しかし、根本的にいえば、「無量義」は「一法」より生ずるものであり、また「百界千如」「一念三千」という生命の実相は、いずこの世界にあっても変わるものではない。その次元から考えた場合、広布の進め方、方程式において、何が重要になるかについては、よくよく指導を受けていただきたい。

第五に、どこまでも「健康第一」で進んでいただきたい。皆さま方は、大切な大切な広宣流布の仏子である。もし、健康を損なうようなことがあれば、これほど残念なことはない。

ゆえに生活はリズム正しく、休養も十分にとっていただきたい。自発的な意思でやることは別として、権威や上からの圧迫で、自分の体を損なうまで無理をする必要はないのである。

どうか、リズム正しい生活、価値的にして快適な活動の日々を送りつつ、「仏法」のため、「広宣流布」のために、ご奉公していただきたい。すばらしき人生を築いていただきたい。ご一家の繁栄の道を開いていただきたい、と申し上げ、本日のスピーチとしたい。

四番目と五番目の指摘は、おそらく一般的な指摘のようにも受け取れるかもしれない。表現も温和である。しかしながら、「日本とアメリカでは」、「広宣流布の進め方にも、当然、違いある」ことは、随方毘尼の精神として、池田が1960年代以来一貫して強調してきた要点であるし、「健康第一」というごく常識的な注意喚起がなされているわけであるが、コンベンション一辺倒なNSAの、根こそぎ組織活動没入的体質が、結局このときもまだ克服されていなかったことが指摘されているだろう。

この日、池田は、伝統日本人的な気質のリーダーに向け、従来から指摘してきたことを繰り返し強調しているのである。それは、NSAがそういう気質・体質を温存し続けていたことが如実に物語られているだろう。

26. 一九九〇年二月—ロサンゼルスの一十七日間、その二

十七日間の、上記でとりあげた以降の会合における池田の発言のうち、重要だと思われる点をかいつまんで以下で指摘しておこう。

まずは、2月15日に行われた「第2回SGIパン・アメリカン諸国会議」での発言である。北中南米18カ国の代表が参加しているが、誰を念頭に置いて述べられているのか明示されていなくとも、その誰かが想像しやすい部分も少なくない。

さて戸田先生がもっとも嫌われたのは、「形式主義」であった。ゆえに弟子の私も、徹底して「実質主義」の人間である。

「形式」が大切な場合もあるが、中身のない形式主義は悪である。形式は“死”、実質は“生”、形式は“迹（影）”、実質は“本（本体）”。形式は保守となり、実質主義は進歩と発展をもたらす。

たとえば会合をする。何人来たか、きちんとできたか—そうしたことのみを気にし、形にとらわれて、実質を見失う。これでは失敗である。

「実質」とは、たとえ少人数でもよい、来た人が、心から納得し、喜び、御本尊への確信をもって出発できたかどうかである。たった3人であっても、御本尊を拝し、御書を拝読し、感激し、信心の炎が燃え上がっていけば、仏法の眼から見て、計り知れないほど偉大な集いである。

反対に、何千人集まり、整然と進行し、立派で盛大そうな姿を見せたとしても、皆がただ疲れ、苦しみ、心からの信心の喜びがないのであれば、結果として、虚栄の集いとなってしまう。

リーダーのための会合でもなければ、組織のための会合でもない。一人の「人間」の発心と成長のための集いなのである。

「人間」のために組織があり、リーダーがいる。組織やリーダーのために「人間」が従となれば、もはや仏法の生命はない。その濁りによって、「仏の力」「法の力」がせき止められ、功德も広がらず、発展も止まってしまう。

(池田 2006 : 39-40)

池田がこうに述べたとき、ウィリアムスはその背後のひな壇に座していた。そのとき彼がどのような表情を浮かべていたか、今は知る術もない。

次は、21日開催の「第一回 NSA 最高（中央）会議」⁴⁴でのスピーチである。おもな出席者は、このとき設けられた NSA 最高参与のポストに就任した和田栄一創価学会副会長、他三名の日本からの副会長、秋山 SGI 婦人部長。NSA からは、ウィリアムス理事長以下、副理事長、エリオット婦人部長⁴⁵、ダニエル・ナガシマ青年部長、イアン・マクレイス男子部長、エイコ・ヒロタ女子部長ら最高幹部たちであった。

「誠実、公平、進歩の人に」と題されたこのときのスピーチの内容は、歯に衣着せぬ直裁なもの言いの非常に厳しいものであった。

⁴⁴中央会議“Central Executive Committee”はこのとき設けられることが決定した（第1回の中央会議の開催は1991年である）。その目的は組織の民主的・合理的運営であることが、後述する第二回会議の内容から分かる。

⁴⁵カズエ・エリオットについては、(1)の第3節で紹介したが、彼女も1989年に婦人部長に就任した。

「進歩」しないリーダーは、魅力を失う。後輩もかわいそうであり、自分も行き詰る。行き詰まり、人もつかないから、なおさら権威でしばったり、抑えつけるようになる。ますます人の心が離れていく。悪循環である。

御書（1382頁）には14の誘法のうち「^{ほうぼう}浅識」の罪が説かれている。たんに知識が浅いということではなく、そこにとどまり、求道心を失って、“学ぼう”としない姿勢を意味する。それは信心の後退である。

リーダーが変わった分だけ、組織が変わる。わが地域、わが国土の広宣布が進んでいく。その意味でも、リーダーは「知性」を磨いていただきたい。私がさまざまな角度からスピーチを重ねているのも、その願いからである。

池田がNSAの最高幹部たちを前にリーダーの理想を再説するのは、その理想から実際が遠く隔たっていると考えていた、その表出であったろう。さらに続けて述べている。

「平等」「人権」というアメリカの理想一。じつは、仏法の世界こそ、最高にして根本的な「平等」と「人権」を実現しゆく世界である。

人間は「平等」である。上下の差別など絶対がない。組織の役職等は、機構上の仮の姿である。方便であり、皆がより喜んで信仰に励み、幸福になっていくための一手段にすぎない。

ゆえに組織のリーダーとは、皆の“上にいる人”ではなく、皆に“奉仕する人”なのである。戸田先生は「幹部は会員の小使い」と教えられた。

ある意味で、皆の犠牲になっていく決心で、尽くしていくのが、真の広布のリーダーである。

組織の上下にとらわれて、リーダーが自分が偉くなったかのように錯覚したら、仏法の「平等」の精神に反する。

また、リーダーに対して、だれでも自由に、言うべきことを言える雰囲気大切である。私どもは、皆、平等の「^{ぜんちしき}善知識」（良き友）だからである。

仏典には「彼が為に悪を除くは即ち是れ彼が親なり」（章安大師『涅槃經疏』大正38巻）—その人のために、悪い点を取り除いてあげる人は、その人の親の存在である—と説かれている。

黙っていることは、無慈悲に通じる。小さな感情にとらわれての非難はよ

くないが、建設的な、価値ある意見は必要である。言われたほうも、それに感謝できる大きさを持つてば、たがいの心の世界が広々と開けていく。

また相手の成長のために、必要な“注意をする”ことは慈悲であるが、自分の感情で“叱る”のは傲慢である場合がある。リーダーは人を叱ってはならない。人の心は限りなくデリケートである。

同様に、男女も「平等」である。女性を抑えつける男性は、文明人とはいえない。

御書には「女るひはいかなる^{とが}失ありとも一向に御^教け^訓うくんまでも・あるべからず、ましてい^争さかうことなかれ」（御書 1176 頁）と仰せである。

一女性に対しては、どんな失敗があっても、叱ってはならない。まして争うことは絶対にいけない。

女性はそれほど繊細である、とのお心と拝される。「レディー・ファースト」の国であるし、女性をこれまで以上に尊重していただきたい。

また女性のほうも、男性のリーダーに盲従しては、両方が不幸になってしまう場合がある。むしろ、弓と矢のように（御書 975 頁）、男性が正しい軌道を進めるよう、方向を定め、時には軌道修正していくことが、正しい仏法の精神にのっとりすることになる。

大聖人は「夫の心をい^誨さめば童女が跡をつぎ末代悪世の女人の成仏の手本と成り給うべし」（御書 1088 頁）と教えておられる。

一池上兄弟の夫人たちがともに夫の心をいさめて、夫たちが大聖人の御指導どおりに振る舞うようにしていけば、法華経で即身成仏の姿を現じた童女の後継となり、末法悪世の女性の成仏の手本となられるであろう一。（池田 2006 : 78-80）

ここまで何度も十七日間に行われた池田のスピーチを引用してきたが、その論点はいくつかのポイントに収斂していることが分かる。池田は驚くほど入念に繰り返し指摘しているのである。

第一点は、リーダー像である。池田はいっかんして権威を振りかざすようなリーダーを排除する。その理想は、「皆に奉仕する人」であり、戸田が説いた「会員の小使い」である。役職者は高位にあればあるほど、謙虚であることを求められている。

第二は、組織のあり方である。「人間のために組織があり、リーダーがいる。組織やリーダーのために人間が従となれば、もはや仏法の生命はない」、「リーダーのための会合でもなければ、組織のための会合でもない。一人の人間の発心と成長のための集いなのである」という指摘が、池田の掲げる組織の理想とするところである。

第三に、第一と第二を受けて、池田において「形式主義」が厳しく排される。やはり戸田を引きながら、「形式が大切な場合もあるが、中身のない形式主義は悪である」と断じ、「形式は“迹（影）”、実質は“本（本体）”。形式は保守となり、実質主義は進歩と発展をもたらす」と述べている。

これらの指摘が、十七日間の滞在中の池田の指導の要点だったことが、この時代のNSAにおいて何が失われていたかを如実に指し示しているだろう。

1980年代の中盤以降、NSAがかつての路線に回帰するにつれ、池田は非常に厳しい評価を下していたという。ダニエル・ナガシマは、1989年ころNSAの青年部の一員として日本を訪問したが、池田と面談の際、「オールド・ネイビーが入ってきた」と他国の青年も集う場で揶揄されたという。なんとなれば、そのときNSAの青年たちは、あいかわらずウィリアムスお気に入りの、袖口に階級章の入った白い制服を着用していたからである。

池田は、他の国々の青年たちの前で、NSAの大時代的な不自然さを叩いたのであった。このときナガシマは、なんとしても池田の心情に応えねばならぬと強く決意したという。

さて、十七日間滞在の終盤、24日には「NSA三十周年記念総会」が開催され、21日の最高会議で就任が承認された和田栄一NSA最高参与が紹介されるとともに、NSAの新体制が発表され、“new NSA”の出立が宣言された（『聖教新聞』1990年2月26日1面）。

池田は、十七日間滞在の最終日に至るまで研修を行いスピーチしている。滞在最終日の28日、マリブ研修センターにおいてNSA各部代表メンバーに対する特別研修で以下のように述べた。最後の最後であるから、もっとも念を押したい点は何であったか、率直に表れているだろう。「寛容、忍耐、紳士たれ」とタイトルの付されたスピーチは比較的短いものであったが、末尾で次のように述べられ、これが十七日間の結びとされている。

仏法は「法」が根本である。広布の前進も、根本は、すべて御本尊である。「人」は一次元からいえば、正しく正法を受持し、広宣していく組織の責任者である。

要するに、その中心者が御本尊を根本としているかどうか。それがもつとも肝要の一点となる。中心者が、その根本を忘れて、権威の力で、人を上手に左右し、動かしていこうとすることは危険である。正法の世界を壊してしまう場合すらある。

ゆえに、あくまでも「法」を根本にし、大事にするリーダーでなければならない。(池田 2006 : 139)

27. SGI-USA

1990年が、日本・創価学会においていかに重大な局面であったかについてはすでに述べたところである。2月のロサンゼルス十七日間滞在における池田の指導が、「魂の独立」を見据えて行われたものであるのかどうか知ることはできないが、日本において宗門と袂を別つに先立って、アメリカにおいて時代を画す大きな動きがあったことが分かる。

1990年2月に最高参与に和田栄一が就任したことも述べたが、この役職はNSAの指導役であり、これ以降もウィリアムスは理事長にとどまっていたが、従来のような振る舞いは控えざるをえなくなった。

3月23日に開催された「第二回NSA最高会議」では、一カ月前の池田の指導を承け、それを具体的に施行するための取り決めを行った。最高会議のNSAにおける組織上の位置づけの確認に始まり⁴⁶、個々の会員の一週間の活動のスケジュールなどの細かな点にいたるまで、具体的に検討している。座談会・教学・家庭訪問や個人指導・人材育成・勧誘のガイドライン、あるいはリーダーの振る舞いなどの諸点にわたって取り上げられた。

したがって、状況の変化を受け、ウィリアムスは会議の閉会挨拶で、かつてとはだいぶ異なったトーンで、次のように述べざるをえなかったのだろう。「組

⁴⁶ 'The Central Executive Committee is a decision-making body that executes the important duties of the organization' (WT, NOV.30, 1992, p.3)

織体の意思決定は、出席者の誰もが声を上げて十分に議論してなされるものでなければならない。」「そして、そのようにして私たちは、池田 SGI 会長から託された “new NSA” を建設してゆくのだ。」(WT, 1990 年、4 月 2 日 : 2)

ウィリアムスが正式に理事長を退くことは、1992 年 8 月に発表された。1991 年 6 月には、NSA はその名称を捨て、Soka Gakkai International USA (SGI-USA) となっており⁴⁷、その最高決定機関である評議会(SGI-USA Council)に、ウィリアムスが、フレッド・ザイツ(Fred Zaitzu)を新理事長として推薦したことがワールド・トリビューン紙上で伝えられた(任期は一期が三年で 11 月からのスタート)。ザイツは、このとき副理事長であるとともに、1991 年に設けられた壮年部長の初代の任にあった(WT、1992 年 8 月 24 日 : 1)。

SGI-USA の法人法規にしたがって、ザイツの理事長への推薦は東京の SGI 本部へ具申された。またこのとき、ウィリアムスは SGI-USA 名誉理事長となり、引き続き副理事長として任に当たることも、SGI 理事長でもあった和田 SGI-USA 最高参与によって発表された。この後もウィリアムスは、三十二年間にわたって NSA=SGI-USA を率いた功労者として遇せられ、1998 年に定年ということで最終的に引退した。

フレッド・ザイツ(日本名は、財津光明)⁴⁸は、1940 年山梨県生まれで、神奈川大学経済学部で貿易学を学んだ。1964 年に大学を卒業するとき、商社に就職が決まっていたが、縁あって創価学会の広報を行う外郭団体「アジア民族協会」に就職した。1967 年より聖教新聞社におもに記者として勤務した。

ザイツが信心を堅固なものとしたのは、池田との忘れられない邂逅によるという。池田は 1962 年から学生部に向け「御義口伝」を講義していたが、受講することができたのは学生部の部長以上のみであった。ザイツは班長、そしてグループ長となったが、なにより部長になりたかったのは、池田が手ずから行うその講義に連なりたかったからであるという。

学生部の部長となり、念願の「御義口伝」の講義を受講できることになったのは第一期の途中からであったので、「1.5 期生」といわれたという。「自分で紐解くだけでは、「御義口伝」はそのままなかなか分からないが、先生が、人生

⁴⁷ 日本語表記では「アメリカ SGI (創価学会インタナショナル)」。1991 年 6 月 19 日付で法人名称が変更された(『聖教新聞』1991 年 7 月 13 日 2 面)。

⁴⁸ 以下は、2010 年 11 月 12 日にサンタモニカの SGI プラザにおいて実施した Fred ZaitzuSGI-USA 名誉理事長へのインタビューによる。

という視点から、また現代社会を生きるという観点から解説してくださって、明快に分かったという実感が得られた。人間の生き方、正しい生き方、生命、そして法華経がどのようなものであるのか、教えていただいた」。これが決定的で、人生の原点になったのだという。

「御義口伝」の講義が三月に終わったとき大学も卒業になるので、先生がお祝いにと、三十人くらいで招待されて学会本部の地下の食堂でカレーライスをご馳走になった。美味しかったのは覚えているが、どんな話をしたのか覚えていない。

しかし、覚えているのは、帰るとき、先生が一人一人に握手してくださった。じっと目を見つめてもらって、握手してもらった。とても温かかった。「君は名前はなんというんだ？」と聞かれたので、「財津光明といいます」と答えると、先生は「覚えておくよ、君を」と言われた。その言葉に「ズシンときた」のだという。まるで「100万ボルトの電流に撃たれたような」衝撃だった。「覚えておくよ」という、ものすごい激励をいただいて、このとき以来、ずっと先生についてゆくのだと堅く決意したという。

ザイツは、東京外国語大学が第一志望校だったが、外大に進めなかった。しかし、神奈川大学は奨学金が給付される特待生の待遇で合格したので入学した。英語はある程度得意であったこともあり、聖教新聞の記者のとき、1971年シアトル・コンベンションに特派員として派遣され、初めてアメリカに行ったという⁴⁹。1973年からは、聖教新聞のアメリカ常駐特派員となりサンタモニカに着任した。

しかしながら、ザイツは、日本から派遣されてきたということで、NSAを監視に来たのではないかとウィリアムスに警戒されているような気配を感じたという。それは、疑心暗鬼に過ぎなかったのではないかとも思えたが、どこへ行くにも、ウィリアムスの部下に同行されていたという。

ザイツは、アメリカに到着するや否や、1968年に開始されたコンベンションが最初の頂点に登りつめるプロセスをつぶさに目の当たりにした。アメリカは広いな、大きいな、皆、自由でのびのびしていると思ったのと、当時NSAは拡大期で、第一印象では、メンバーの熱気がものすごかった。皆、明るくて、

⁴⁹ このときの見聞が、財津・平野（1972）としてまとめられている。

活動を楽しみ、信心に感謝しながら頑張っている姿が印象的だったという。

1971年以降フェイズ2までは、いわば第一期の大コンベンション時代だった。ロサンゼルスメンバーたちは全面的にコンベンションを支えていたが、負担は相当なもので、1975年のブルー・ハワイ・コンベンションが終わると、「こういうのは、もうこれっきりにしてほしい」という雰囲気がありありと漂っていたという。このときはロサンゼルスからだけでも八千人くらいが駆り出された。

それでも、まあ、(NSAの)職員が三カ月、あるいは六カ月、準備から行くのは仕方ないにしても、一般のメンバーがかなりの期間、仕事を休んで参加するのは、経済的な負担も大きいのみならず、一家で四人だと、一人500ドル、2千ドルもかかるわけで、とにかく相当な負担となった。「毎年のことだし、(NSAで)オリンピックを毎年やるようなものだった」。

当時は「信心即コンベンションだった。組織の力もあったし、ウィリアムスさんに吸引力もあった」。それでまた、メンバーも限界までやったのだと思う。

それでも、「そういう苦しみのなかで、メンバーは、たとえウィリアムスさんに言われたにせよ、広宣流布のため、先生のために、コンベンションを行っているのだという気持ちをもっていたはずだ」。

それが、フェイズ2が起こると事情が変わった。

ザイツは、1977年から聖教新聞特派員としての仕事にくわえて、NSAの組織の中での活動に関与を深めた。それは、フェイズ2の混乱を立て直すために、東京から指導にやってきた和泉覚副会長らから、「ザイツもがんばってくれ」と言われ、組織の活動に力を注ぐことになったからである。このころ創設されたNSA 教学部の責任者にもなっている。

1978年にはウエスト・ロサンゼルス本部の本部長になり、1980年にシアトルに移動になりノースウエスト方面長(Northwest Territory chief)となった。また1982年にシアトル総合方面長(Seattle Joint Territory chief)となり、その後、副理事長に就いている。また、1991年に初代の壮年部長にも任命された。つまり、ザイツは、フェイズ2による混乱と停滞のなかで、その立て直しに取り組むところから組織人としてスタートを切っている。

フェイズ2によって、それまでの組織機構が見直され、新しいものが求められ、侃々諤々^{かんかんがくがく}しながら、アメリカ的なあり方が模索された。男女青年部、ある

いは四者が廃止され、折伏をはじめ組織動員の活動を停止するなど、日本的だと思われる組織と活動が次々と排されたことはすでに述べたとおりである。

そういう混乱のただ中で、ザイツが組織人としてのキャリアを開始したことは、後日、二代目の SGI-USA 理事長として演じることになった、その役回りを考えるとき非常に示唆される点があると思われる。

1992 年 11 月、ザイツが第二代 SGI-USA 理事長に就任したとき、ウィリアムスのコンベンション路線はすでに停止していたとはいえ、組織的にはまだ混迷、あるいは停滞を脱していなかった。

しかしながら、希望も兆しつつあった。創価学会が第二次宗門事件をへて 1991 年に「魂の独立」を果たしたことは、アメリカにおいても大きな影響があった。「衣の権威」が消失し、風通しが良くなった影響が全面的に出てくるにはまだしばらく時間がかかったが、以下で述べるような直接の変化があった。

つまり、1984 年にサンフランシスコの妙信寺が落慶すると、アメリカにおける日蓮正宗寺院は計六カ寺となったが、これらを NSA は養わねばならなかった。そして、それには御授戒の際の御本尊下付料が充てられていたが、六カ寺を維持するのに必要な経費を稼ぎ出すには、毎年七万二千人の折伏が必要になるという試算が宗門より示されたという。

実際、1980 年代の中頃以降、第二期の大コンベンション時代は、また大折伏時代でもあったが、折伏に邁進せざるをえなかったのは、まさにこのような経済的な必要に迫られていたという事情もあったのである。

84 年に四万二千人、85 年に六万七千人、86 年には八万一千人、87 年に六万人、88 年に五万三千人、89 年に二万七千人、そして、池田の十七日間指導の行われた 90 年は二千七百人まで激減するが、このような数字が記録されている。⁵⁰

1986 年ころに信濃町を訪れた NSA のある幹部は、池田から無理な折伏をするなど強く釘を刺されたという。池田は、マンスフィールド米駐日大使から、「ストリート折伏を活発にしているのですね」と婉曲にではあったが批判的な指摘を受けたのだという。それで、池田から、入信の原則をしっかりと決めて、それに則ってきちんと折伏するようにと求められたという。

⁵⁰ これらの数字は、ザイツより教示されたものである。

それで、入信五原則が制定されたという。つまり、家族が認めている・座談会に出ている・会合に出ている・唱題や勤行もしている、ワールド・トリビューンを購読しているという五原則である。

ところが、ウィリアムスは、入信五原則は止めろと主張し、その施行は沙汰済みとなってしまったのであった。ウィリアムスが折伏の手綱を緩めることができなかったのは、おそらく上述のような宗門経済上の理由が大きかったと思われるが、ということは、ウィリアムスと宗門はある程度以上、近接していたと考えることができそうである。

なんとなれば、80年代半ば以降、池田は機会あるごとにウィリアムスを厳しく指導していたが、宗門側はウィリアムスを取り込もうとする思惑がうかがえるような丁寧な扱いが顕著であったという。

そのような状況も、ザイツが理事長に就任した92年11月には様変わりしたといってよい。SGI-USAはまだ混迷と停滞のなかにあっただが、ウィリアムスの大コンベンションと強力折伏路線と、そして宗門の傘のいずれもが消失し、創価学会の三代会長を経てストレートに日蓮へ直結する「師弟不二」路線の“SGI Buddhism”が胎動を始めていたといえるだろう。

しかしながら、ザイツが理事長に就任した時点では、その胎動はまだ微弱なものであったし、ザイツが理事長の任にあった七年間は、アメリカ広布の歴史のなかで最も厳しい時代であり、ザイツは「贖罪の七年間」を過ごすことになったとは、後に第三代SGI-USA理事長に就任するダニエル・ナガシマのコメントである。

ザイツが、理事長に就任したとき、もっとも優先して心がけたことは、「先生とどう呼吸を合わせていくかということが根本命題だった。そのために、なによりも先生のオフィスである第一庶務室の長谷川重夫室長と緊密な連携をとることを心がけ、先生との連絡を密にした」という。

そういうザイツに、池田から届いたメッセージは、「ザイツは、ウィリアムスとまったく違うことをやれ！」という、きわめて明快であるばかりか痛快さえあるアドバイスであった。

ウィリアムスとまったく違うこと、それは、例えばスピーチであれば、「ウィリアムスは感情的に大きな声でワッとやる。ザイツは静かにやれ。理路整然と御書を用いて皆が納得するように、感情に走らずきちんとスピーチ原稿を作

成せよ」という指導であった。それで理事長在任中、ザイツは公的な場でのスピーチには必ず原稿を用意し臨んだのであった。しかし、その準備に時間を取られ夜遅くまで机に向かうこともしばしばだったので、秘書にはずいぶんと迷惑をかけたと述懐している。⁵¹

28. “SGI Buddhism” へ

ザイツへのアドバイスのなかで、「独裁は止めよ。カリスマ的独裁は一切やるな」という点も、池田の指導のポイントであった。

「もともと私は独裁できるタイプじゃないので、そういうこともなかったのですが、それで、合議だということで、合議ということは、皆と話し合うことだということで、それならいつでもできるので、皆さんに好きなことを言っていただく、それを私が最後にまとめる方向にもっていくという、そういうスタイルを心がけた」のであった。

「ですから、最高会議は、ウィリアムスさん時代とちがって、侃々諤々と議論がすごくなった。私が理事長になってから、皆んなの鬱憤が全部出てきた。副理事長クラスは、ガイさん、ササキさん、中林さん、カサハラさん、エプスタイナーさん、少しあとでマーチンさんなど論客ぞろいだったので、とても太刀打ちできなかった。だから、どんどんみなさんに意見を言ってもらって、時間はかかったけど、合議しながらそれをだんだんまとめるようにした。」

アメリカ人は、ディスカッションが大好きだから、だから、ディスカッションさせないと憤懣がたまってしまう。それをどんどん出してもらうことが大事であることを学んだという。そういうディスカッションの高まりの中から、女性の処遇の問題が浮かび上がってきた。つまり、SGI 組織の様々なレベルにおいて、女性の役職への登用が不十分であるという不満が表面化してきたのであった。

女性の問題は、波紋が広がるように拡大し、アフリカ系や少数派の人々の幹

⁵¹ ザイツは理事長に就任するにあたり、自らに毎月聖教タイムス上に「理事長から」'From the General Director', というタイトルで論説を執筆することを課した。1995 年分までがまとめられて一冊に編まれている(Zaitsu 1995)。また、SGI-USA としての発足の意義を理事長に就任直後、論考にまとめている(Zaitsu 1993)。

部への任用が充分でないという声となったのであった。ときあたかも、全米を震撼させた1992年春のロサンゼルス暴動⁵²と同時期のことで、この大事件の推移と共振するように、SGI-USAは組織のあり方の見直しを迫られたのである。

人種民族問題は、アメリカ合衆国の歴史を貫く、おそらく最大の社会問題のひとつであるが、60年代の公民権運動を通じ、基本的には克服されたという認識が全米で共有されていたはずであった。それが、92年春のロス暴動によって、未だに解消されざる現実であるという厳しい認識が突きつけられたのであった。

このような大きな社会問題の影響も相まって、女性、エスニック・グループ、セクシャル・マイノリティーなど、社会的弱者への配慮を深めるために、SGI-USAは1995年に「ダイバーシティ委員会」“Diversity Committee”を設置した⁵³。ダイバーシティ委員会は、ナショナル・レベルとローカル・レベルで二重に組織が設けられ、月一回の会合が行われた。

ダイバーシティ委員会は、理事長のザイツにとって、身を切られるような非常に厳しい試練であったという。アフリカ系、ヒスパニック、アジア系の代表に集まってもらい会合を開催したが、これらの人々が、いかに組織の中で差別を受けてきたのか、耐えがたい思いを経験してきたのか、そのような彼らの思いすべてを受け止め、そういう思いをさせた白人と日本人の側が過ちを認め、そして改める、そういう取り組みとして実施されたからであった。

そして、この取り組みの延長に、「仏法は家庭にあり、仕事にあり」‘Buddhism in Family, Buddhism in Work’を旗印とする“Neighborhood System”が導入されることになった。日本でいうところの「ブロック制」であるが、SGI-USAでは、“Geographical Reorganization”とも呼ばれている（略称Geo-Reo ジオリオ）。ジオリオは、1994年ころから順次導入され、1997年に全米をカバーし一応の完成をみる。

すでに紹介したように（第14節）、日本においては1970年、広布第二章の眼目の一つとして「タテ線」から「ヨコ線」への転換、つまり地域ブロック制は

⁵² アフリカ系と白人らとの間の人種民族問題を背景に、いくつかの事件をきっかけに1992年4月末から5月にかけて起こった暴動である。この激しい暴動の鎮圧のために連邦軍の部隊が投入され、死者58人(53人とする文献(大谷2002:204)もある)、160人の重体を含む2,300人以上の重軽傷者をだし、6,345人が逮捕された。また3,767軒の建物が火事となり、10億ドル相当が燃えた(中村2014)。

⁵³ SGIにおけるLGBTグループの最初のスタートは1996年のことであるが、当初はピア・グループとして発足した。

導入された。日本と比較し、アメリカにおいてブロック制への移行が四半世紀以上も後となるのは、いくつかの理由を考えることができる。

創価学会の場合、多くの人がすぐに思いつくように、移行の理由は、日本においては公明党の結成と政界への本格的進出が、ブロック制の導入と緊密に関連していることである。折伏のラインであるタテ線は、選挙区には関わりがないので、集票活動には効率的でない。したがって、政治活動への関与は、地域ブロック制への転換を促したという事情がある。

アメリカにおいては政治や政党に SGI はコミットしていないので、上述の事情は存在しない。したがって、ブロック制が導入される必要は生じないが、そのような状況のなかでブロック制が導入されるのは、そこに別の事情が作用していて、おそらくその事情は、SGI-USA の変化、あるいは一定程度以上の成長や成熟と関連していると考えられるだろう。

日本の宗教教団の事例をふまえると、タテ線、つまり導き（折伏）の擬制的親子関係から、ヨコ線、つまり地区ブロック制への移行は、多くの場合、およそ十年ほどの短期間に三十万世帯くらいの規模以上に急成長を遂げた教団で生じることが確かめられている⁵⁴。

およそ十年間ということの意味は、擬制的親子関係を軸とする組織がまだ世襲されるほど定着していないので、教団の一元的管理への移行が可能であるということである。そして、三十万という規模は、信者への情報伝達やその他集会などの活動効率と、信仰共同体の情緒的連帯感や帰属意識の強度とのパートナー関係の分岐点であると考えることができる。つまり、教団が恒常的な人員拡大を目指すならば、擬制的親子間の第一次的紐帯の強度は失っても、組織の維持と発展が図られねばならないからである。

SGI-USA は、1997 年に全米 8 ゾーンからなるブロック制を施行するが、このときはまだ十年と三十万の条件は満たしていないと思われる。しかしながら、アメリカにおいては日本と異なった事情によって、ブロック制の導入が促進されたのであった。それこそ、さきほど述べたダイバーシティ委員会とそこでの

⁵⁴ この観点からすると、創価学会の 1970 年の 750 万世帯という会員数は、ブロック制への移行の時期が、むしろ例外的に遅かったということができるかもしれない。宗教教団が、擬制的親子関係を基軸とする信者組織から地区ブロック制へ移行する諸条件とその含意について、詳しくは秋庭・川端（2004：192-206）を参照のこと。

議論に関わる事柄である。⁵⁵

つまり、NSA 時代は、なぜアフリカ系やヒスパニックやアジア系など少数派の人々が幹部に就任できなかったのかというと、それは組織の最小単位の地区がコミュニティ・ベースでなかったことに起因する。そのこと、つまり地区がタテ線を基礎にして構成されていることが、アメリカにおいては日本では生じない問題をもたらした。

アメリカにおいて地域コミュニティは、エスニック・コミュニティであることが一般的である。「近隣の街」シカゴの事情についてすでに指摘したが（第19・20・22節）、この事情はある程度以上、全米に当てはまる。

そうであるすると、もしブロック制によって地区ができあがっているならば、地区のメンバーはほとんどが同じエスニシティの人々であるだろう。しかし、実際には折伏のラインであるタテ線によって地区が生み出されているので、多様なエスニシティのメンバーが集って地区を作り上げている。そして、このことは多様なエスニシティの人々の交流を促すというポジティブな側面を有するが、反面では幹部の任用にあたって、アフリカ系や他のマイノリティーの登用を阻むことになったのである。

例えばある地区の座談会してみると、いろいろなエスニシティのメンバーが参加しているが、それらアフリカ系や他のマイノリティーのメンバーは、ときに一時間以上も車をドライブするなど遠路はるばる座談会に参加しているということも珍しくなかった。そして、リーダーはいつも白人や日本人ということがふつうであった。なぜならそれらのリーダーの折伏によってその地区が発足しているからである。

したがって、ジオリオを導入することで、エスニック・コミュニティに基づいて地区を編成する。そうすることで、グループ長だけでなく地区部長以上、支部長や本部長も白人や日本人以外のエスニシティの人々を登用する途を拓き、幹部任用に当たってエスニシティ間の不平等を是正することを可能にしたのである。

このように、1997年にいちおうの完成をみるジオリオ制は、日本における地域ブロック制への移行とはまた異なった、アメリカ合衆国固有の事情とそれに

⁵⁵ ここで述べる以外の理由については、別に論考を準備中。

対する SGI-USA 独自の対応の結果であったということが理解できるだろう。

1999 年 12 月、ザイツは名誉理事長に退き、ダニエル・ナガシマが第三代理事長に就任する。ザイツが理事長の任にあった七年間は、決して長いとはいえないかもしれないが、SGI-USA にとって決定的に大事な時期であり、ザイツは細心の注意を払いながらその重責を果たしたということができよう。この時期、日本においても創価学会本体が激動の最中であつたが、アメリカにおいても非常に慎重な舵取りが求められたのである。

ザイツは、「私の理事長時代は、たんに畑を耕しただけで、収穫は今、ナガシマ理事長になって稔りつつある」と述べているが、たしかに SGI-USA はナガシマ理事長体制以降、安定した着実な発展期に入ったということができそうである。それは、ナガシマ理事長就任と時を同じくして、四者の部長全員にアメリカ人が登用されたことにも現れているようである⁵⁶。

また、ナガシマ理事長時代には、“SGI-USA Charter” が定められ、アメリカ合衆国における非営利な団体として組織運営が近代化されるなど整備が進められた。

ナガシマは、しばしば「私は最後の日本人の (SGI-USA) 理事長です」と自己紹介をするが、その含意は、SGI-USA は日本発祥であるが、今やアメリカ人の宗教として、アメリカ合衆国に根付く世界宗教であることを射程に収めたという含意の表明であるように思われる。

2000 年 7 月、SGI-USA の新生を励ますように、池田は、「わが偉大なるアメリカの尊き同志に贈る」として『舞え！新世紀の自由の大空へ』と題する長編詩を『聖教新聞』に発表している。新世紀と新体制の SGI-USA への期待が幾重にも綴られた長大な作品であるが、ごく一部を引用する。

地涌の菩薩が

誕生した！

動き始めた！

アメリカ大陸に

⁵⁶ 男子部長、女子部長、青年部長は、このとき以前にアメリカ人が起用されているが、1999 年になって壮年部長と婦人部長にアメリカ人が初めて起用された。

新しい時代の風が
吹き始めた！
紅玉の杯を交わしながら
新しい 素晴らしき
平和と幸福の光道が
できあがりつつある。

朗らかな
歌声を吹き上げながら
わがアメリカの五十州に
未来を光らす
おお 星条旗は翻る！

自由の鐘の鳴り響く
歴史を創造し行く五十州にも
わが地涌の菩薩が
立ち上がった！
地涌の菩薩が
走り始めた！
そして
地涌の菩薩が
戦い始めた！

偉大なる
世界の縮図のアメリカに
新しい波が起こり始めた！

確かなる善の世界へ
大いなる新世紀への
翼が広がり始めた！

SGI-USA の新生を寿ぐ詩句の連なりは、このあと創価三代の系譜とアメリカ
広布の意義を説く。牧口が見ることのなかった民主日本と、そして、戸田が踏
むことのなかったアメリカ合衆国に、進みゆく広布の波動を実感するように池
田は述べている。

アメリカ！
私の生きている
自由なアメリカ！

初代・牧口常三郎会長は
すでに二十世紀の初めに
「未来の文明の
統合と結合の天地は
アメリカ合衆国なり」と
予見されていた。

二代・戸田城聖会長は
「アメリカのおかげで
戦後の日本に
信教の自由がもたらされ
広宣流布の時が開かれた。
大作！
アメリカには恩返しに
行きたいな！」と
何度も何度も語られた。

ゆえに 私は
その直弟子として
世界への平和旅の第一歩を
愛するアメリカに刻んだ。

このアメリカの
永遠なる
信頼と繁栄と安全を
アメリカの同志とともに
守りたい。

そして、最終連は、次のように結ばれている。「天国は存在しない／この苦悩の世界にあって」「人間教育の／平和と繁栄のために」「高貴な夢」が大学＝教育に託されているのである。

二十一世紀文明へ
若き学徒の
そして 若き指導者の
人間教育の
平和と繁栄のために！
我らのアメリカ創価大学は
太平洋の王者の波を見つめながら
幾世紀の期待を担って
オレンジ郡の澁刺たる丘の上に
無数の行列と
無数の声 高鳴る歌と共に
建設されてきた！

わが人生は
愛するアメリカで
若き自由人のために
そして 無限の思い出を
共々に創りながら
夜明けの喇叭の音を
響きわたらせながら
総仕上げしゆく決心である。

我らは
平和こそ万歳！
人生こそ万歳！
そして
幸福こそ最大の万歳！ と
叫びながら進む！

天国は存在しない
この苦悩の世界にあつて
永遠に明るい
永遠に楽しく 透き通った
高貴な夢を
現実に見ながら歩むのだ！

二〇〇〇年七月二十一日

創価三代の夢が結実した、アメリカ創価大学(Soka University of America=SUA)は、カリフォルニア州オレンジ郡において、2001年5月3日に開学した⁵⁷。ちなみに八王子の創価大学の開学からちょうど三十年後のことである。

日本において創価学会のいわば「近代化」の歩みは、1970年代と共に始まり、1990年代初頭の宗門との決別で一区切りついたとすることができるが、SGI-USAにおいては、その胎動は1990年から始まり、ザイツが理事長に就任した頃から本格化し、2000年に入ると新体制が安定したと考えることができるだろう。

そのような新生と安定のシンボルであるかのように、アメリカ創価大学の開学は、池田の長編詩『舞え！新世紀の自由の天空へ』の掉尾に飾るように詠いこまれている。

⁵⁷ 前身のロサンゼルスのアメリカ創価短期大学(SULA)は、1987年に開学しているが、SUAは4年制のリベラルアーツの大学として機構およびキャンパスが拡充されて開学し、今日では全米の大学認証機関より高評価を得ている。

29. 「広布五十五周年」

2015年9月、SGI-USAはアメリカ広布五十五年を記念する全米最高会議において新体制の発足を発表した（『聖教新聞』2015年9月20日1面）。第四代の新理事長に、アディン・ストラウス(Adin Strauss)が就任し、初のアメリカ人理事長が誕生した。この人事によってSGI-USAのすべての役職のトップにアメリカ人が就任することになった。

ストラウスは、1960年ニューヨーク生まれ、大学卒業後、日本留学中に神戸で日蓮仏法と出会い、1984年に入会。約一年間にわたり関西で信心の基礎を学びアメリカに帰国。1999年にIT関連企業に転職し再来日すると、目黒区で地区部長として広布拡大に奔走したという。その後、アメリカに帰国し、2014年からSGI-USA 壮年部長を務めた。

ストラウスのSGI-USA 理事長への就任を知った、目黒時代の同じ地区の婦人部長であった女性が、聖教新聞『声』欄に寄稿している（『聖教新聞』2015年10月7日4面）。婦人は「地区婦人部長のピンク色の自転車を後ろから追い掛け、地区中を駆け巡ったことは、今でも忘れられない金の思い出です」とストラウスから伝えられたという。

創価学会創立八十五周年の年、そしてSGI-USA 広布五十五年にあたる2015年、アメリカ人であり、かつ日本の広布の第一線を知る、ストラウス新理事長の就任は、アメリカ広布新時代にふさわしい象徴のように思われる。

2016年は「世界広布新時代、拡大の年」と命名されたが、今日アメリカ広布の原動力となっているのは男女青年部であり、なんと弘教の約七割を担っているという。日蓮仏法がアメリカの若者を惹きつけているのは注目すべき点であるだろう。

また、ニューヨーク圏では、2015年、支部平均三十五世帯を超える弘教が記録されている。ニューヨークでは広布の初期からダンサーやアーティストのような、極めて生き残りの厳しい世界を生きる人々の間でSGIが選好されてきたが、その伝統は今も続いている。競争的な大都市において、調和と共生を目指すこの信心が求められている点もやはり興味が深い（『聖教新聞』2015年11月29日4面）。

さて、世界 192 カ国・地域に広がった SGI は、今日、アメリカ合衆国のみならずそれぞれの地で、それぞれの歩みを堅実なものとしているのだろうか。それらについては、他日稿を改めてまた少しく詳らかにしてみたい。

(2017 年 6 月 14 日提出)

参照する文献、資料のうち、以下は略記している。

御書：堀日亨編、1952『日蓮大聖人御書全集』創価学会（第 241 刷、2005 年）。

WND 1999：Soka Gakkai, 1999, *The Writing of Nichiren Daishonin I*. Tokyo: Soka Gakkai.

WND 2006：Soka Gakkai, 2006, *The Writing of Nichiren Daishonin II*. Tokyo: Soka Gakkai.

WT：ワールド・トリビューン (World Tribune)

ST：聖教タイムス (Seikyo Times)

LB：リビング・ブディズム (Living Buddhism)

年譜 2003：三代会長年譜編纂委員会編、2003『創価学会三代会長年譜 上巻』創価学会。

年譜 2005：三代会長年譜編纂委員会編、2005『創価学会三代会長年譜 中巻』創価学会。

年譜 2011：三代会長年譜編纂委員会編、2011『創価学会三代会長年譜 下巻(一)』創価学会

なお、本稿は、平成 23～27 年度科学研究費基盤研究 (B)「欧米多民族社会における日本型新宗教の受容と発展—新たな共同性と宗教の役割」(研究代表者・秋庭裕)による成果の一部である。

また、本稿で用いたデータの収集にあたって、創価学会国際渉外局を通じ

SGI-USA の多くの会員の皆様にお会いできる貴重な機会を得ることができました。ご協力いただいた皆様に心より深く感謝申し上げる次第です。

参考文献一覧

- 秋庭裕・川端亮、『霊能のリアリティへ』新曜社、2004年
- バーダマン、M・ジェームズ『黒人差別とアメリカ公民権運動』水谷八也訳、集英社新書（集英社）、2007年
- Hammond, P., and Machacek, D., *Soka Gakkai in America: Accommodation and Conversion*, New York, Oxford University Press, 1999. (栗原淑江訳、2000 『アメリカの創価学会—適応と転換をめぐる社会学的考察』紀伊国屋書店)
- 堀日亨編『日蓮大聖人御書全集』創価学会、1952年（第241刷、2005年）
- 池田大作『人間革命』第1巻、聖教新聞社、1965年
- 池田大作『私の履歴書』日本経済新聞社、1975年
- 池田大作『新版池田会長全集』第1巻、聖教新聞社、1977年 a
- 池田大作「仏教史観を語る」『大白蓮華』第311号、1977年3月 b
- 池田大作『人間革命』第11巻、聖教文庫（聖教新聞社）、1992年
- 池田大作『人間革命』第12巻、聖教文庫（聖教新聞社）、1994年
- Ikeda, Daisaku, *May My Friends in America: Collected U. S. Addresses 1990-96*, World Tribune Press, Santa Monica, 2001 [池田大作『親愛なるアメリカの友へ 1990～1996年 北米訪問指導・スピーチ集』ワールドトリビューン・プレス、2006年]
- 池田大作『新・人間革命』第1巻、聖教ワイド文庫（聖教新聞社）、2003年
- 池田大作『生命の変革 地球平和への道標』創価学会広報室、2007年
- Ikeda, Daisaku, *May My Friends in America be Glorious (JPN)*, World Tribune Press, Santa Monica, 2008 [池田大作『アメリカの友に栄光あれ！ 1972-87 北米訪問指導スピーチ集』ワールドトリビューン・プレス、2008年]
- 池田大作『新・人間革命』第22巻、聖教新聞社、2010年
- 池田大作／アーノルド・トインビー『二十一世紀への対話』上・下、文藝春秋、1975年（新装版として、池田大作／アーノルド・トインビー『二十一世紀

- への対話 上・中・下』聖教ワイド文庫、2002・2003・2003年)
- Ikeda, Daisaku and Toynbee, Arnold, *Choose Life: A Dialogue*, Oxford University Press, London, 1976
- 池田大作／キッシンジャー、ヘンリー・A『「平和」と「人生」と「哲学」を語る』潮出版社、1987年
- 「池田大作の軌跡」編纂委員会編『平和と文化の大城 池田大作の軌跡 II』潮出版社、2007年
- 「池田大作とその時代」編纂委員会編『民衆こそ王者 池田大作とその時代II』潮出版社、2011年
- 「池田大作とその時代」編纂委員会編『民衆こそ王者 池田大作とその時代VII』潮出版社、2014年
- 井上順孝『海を渡った日本宗教』弘文堂、1985年
- 江成常夫『花嫁のアメリカ』講談社、1981年
- 江成常夫『花嫁のアメリカ歳月の風景 1978-1998』集英社、2000年
- 堀内一史『アメリカと宗教 保守化と政治化のゆくへ』中央公論社、2010年
- 川端亮・秋庭裕・稲場圭信「SGI-USA におけるアメリカ化の進展—多民族社会における会員のインタビューから—」『宗教と社会』第16号、2010年
- 三浦久『追憶の60年代カリフォルニア』平凡社、1999年
- 中村甚五郎『アメリカ史「読む」年表事典4 20-21世紀 [1995-2010]』原書房、2014年
- 中野毅「アメリカ社会とNSA(2)」『講座・教学研究』第4集、東洋哲学研究所、1985年
- なかほげ 中野毅・浅野秀満『アメリカの日蓮正宗』仙石出版、1972年
- 大谷康夫『アメリカの黒人と公民権法の歴史』明石書店、2002年
- Parks, Yoko Yamamoto, “Nichiren Shoshu Academy in America: Changes in during the 1970s.”, *Japanese Journal of Religious Studies* 7(4), 1980, pp.337-55
- Parks, Yoko Yamamoto, *Chanting is Efficacious: Changes in the Organization and Beliefs of the American Sokagakkai*, U.M.I. Dissertation Information Service, 1985
- 佐藤優「新時代への創造「池田大作 大学講演」を読み解く」『潮』2013年10月号
- 佐藤優『地球時代の哲学 池田・トインビー対談を読み解く』潮出版社、2014

号

三代会長年譜編纂委員会編『創価学会三代会長年譜 上巻』創価学会、2003年
 三代会長年譜編纂委員会編『創価学会三代会長年譜 中巻』創価学会、2005年
 三代会長年譜編纂委員会編『創価学会三代会長年譜 下巻（一）』創価学会、2011年

聖教新聞社企画部『新会員の友のために1改訂版』聖教新聞社、2005年

塩原勉『組織と運動の理論』新曜社、1976年

島田裕巳『創価学会』新潮社、2004年

島菌進『現代救済宗教論』青弓社、1992年

創価学会広報室『2013年活動報告』創価学会、2014年

The Seikyo Press, The Nichren Shoshu Sokagakkai, The Seikyo Press, 1966

上藤和之・大野靖之編『創価学会四十五年史 革命の大河』聖教新聞社、1975年

World Tribune, Arise, the Sun of the Century: Thirty Years of NSA, Santa Monica: World Tribune Press, 1989

ウィリアムス、M・ジョージ『アメリカにおける宗教の役割』潮出版社、1989年

尚、「SGI-USAの55年（1）（2）（3）」をまとめ、補論を付し、『アメリカ創価学会<SGI-USA>の55年』（新曜社）として、2017年11月に刊行した。参照していただければ幸いである。

Fifty-Five Years of SGI-USA (3)

Americanization and Post-Americanization of a new Japanese religion

Yutaka Akiba

This paper discusses how Soka Gakkai International (SGI), a largely Christian society comprised of people of many different racial backgrounds, has been accepted in the US. The paper focuses on the history of the propagation of SGI, their conversion process, and the impact of the concepts of Nichiren among new believers.

Many believers of Japanese religions that proselytize overseas are of Japanese origin or descent, but SGI has more than 12 million members in 192 nations and regions, including not only Japanese people living abroad, but also non-Japanese. SGI has more than 110,000 members in the US, many of whom are Americans. So how has Soka Gakkai, a religion said to be grounded in Japanese Buddhism and to have a collectivistic bent, been accepted in the US, which differs from Japan in its language, emphasis on liberalism and individualism, and Judeo-Christian cultural background?

Studies have already identified several reasons that Japanese new religions are being accepted by overseas natives, such as the use of the native language in meetings, the translation of teachings, the adaptation of religious rituals to local lifestyles, the appointment of natives as religious leaders, and an emphasis on detailed personal guidance. These factors also applied to SGI-USA during the 1960s and 1970s. Preceding studies have claimed that SGI-USA had been indigenized by 1980.

In this paper, I will report on SGI-USA based on research conducted over the past ten years, and re-examine the Americanization of SGI-USA.